

---

# 脆弱の王

志冥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

脆弱の王

### 【Nコード】

N2495Y

### 【作者名】

志冥

### 【あらすじ】

先の皇帝より発せられた、『千国宣言』により、千の後継者が次期皇帝を狙い争いを繰り広げる。

第千位王位継承者、脆弱の王「ティアル」はその名が示す様に弱い国力、弱い兵力とすべてにおいて他の後継者から遅れを取っていた。

しかしそんなティアルであったが、知略を駆使し神算鬼謀を用いて皇帝の座を狙うのであった。

拙い文ではございますが、成長していく筆者とティアル達を楽し

んでいただけたらと思います。  
感想、評価を心よりお待ちしております。

## プロローグ

夥しい亡骸が横たわり、血煙り舞う戦場に恐怖で顔の青ざめた青年が震えながら立ち尽くしていた。

青年は吸い込まれそうなほどの碧い瞳と深淵の様な黒髪、全身は黒衣に包まれており、その風貌はおよそ戦場には似つかわしくない、華奢で色白な美しい青年だ。

頭上には小柄な体格には不釣り合いな大きく煌びやかな王冠が敗戦の将を嘲笑うかの如く、鈍く光っていた。

青年の震える膝はそこに立つ事すら許してはくれなかった。

青年はその場に膝をつき、出陣の時とは変わり果ててしまった己の軍容を見渡した。

つい先ほどまでは互いに笑い合っていた戦友達が物言わぬ亡骸となつてしまった。

嗚咽を小さく一つ。

直後、激しい吐き気に襲われ、その場に突っ伏し嘔吐した。

頭上の王冠は青年から離れ地面へと転がり、血にまみれ、遂にはその輝きを失った。

輝きを失った哀れな王冠を誰かが踏みつぶした。

青年が汚物と涙と鼻水にまみれた顔を上げると、そこには黄金の鎧を身に纏った大柄な男が立っていた。

男は青年に見せつけんばかりに王冠を踏みしだき、震える少年を見下した。

王冠はその形すらすでに失ってしまい、施された装飾が血と泥にま

みれ、大柄な男のその足元で事切れた戦友の亡骸と同じ様になった。青年は自分もすぐにそうなるのだと思い、顔に浮かべた恐怖の色をさらに強めた。

「脆弱の王よ、貴様は貴様の敗因を何と見る？」

「兵の量か？ 質か？ 時か？ 場所か？ それとも……天運とでも言うか？」

大柄の男は青年の胸倉を掴み、軽々しく持ち上げた。

苦痛に歪む青年の顔をしばらく眺め、皮肉を込めた笑顔を湛え、低く子供をからかう様に続けた。

「どれも違う、貴様が脆弱だからだ。」

「貴様は殺す価値もない、ここで配下の亡骸と共に朽ちて逝け。」

掴まれていた手を離され、青年は糸の切れた人形の様にその場に倒れ込んだ。

その眼は定まらず、恐怖に染まっていた顔色は絶望で塗りつぶされていた。

大柄な男は自らの築き上げた屍の山を高笑いをして突き進んでいった。

青年は地面に伏したまま、虚ろな碧い瞳でその後ろ姿を見つめていた。

青年は朦朧とする意識の中で、過去を振り返っていた。

何故、こんな事になってしまったのか……。

自分は何処で何を間違えてしまったのだろうか……。

## 第一話

「一体なんだこれは？」

この世にこれほど不機嫌な表情をする者は存在しないであろうと思われるほどに不機嫌な表情で、古びた玉座に肘を付き偉そうに踏ん反りかえっている、深淵の様な黒髪をした碧い瞳の青年がぼやいた。幼い子供の如き、その不満気な顔を意に介する事なく、レンズの分厚い黒ぶち眼鏡をかけたメイドがフレームが歪んでいるのだろうか、すぐに摺り落ちてくる眼鏡を何度も上げながら答えた。

「皇帝から我が君に与えられた領土でございます。」

青年が舌打ちを一つした。

しかし己の主が舌打ちをしたにも関わらず、特に気に留める様子もなくメイドは続けざまに話した。

「皇帝より受け賜ったのはこの古城と金が五百、それと……」

メイドが仏頂面をしながら言葉を詰まらせた。

青年は怪訝そうな表情で「いいから続ける。」と責つ付いた。

メイドは気にしていた眼鏡がベストポジションに納まったのか、微笑を浮かべて続けた。

「兵を五名賜りました。」

「ちょっとまで！」

不機嫌な顔をしながらも最後まで聞いていた青年だったが、メイドが話し終わると同時に勢いよく玉座から立ち上がった。

それまで正面を凝視しながら話していたメイドも少し驚いたのだろうか、視線を青年の方へと向けた。

「領土と言つても古城一つで、城下もないから民もない。」

「金500もこの今にも壊れそうな城を修繕するのに、すべて使つてしまった。」

「さらには兵士が五名だと？ それでどうやって城を守れというのだ？」

メイドの眼鏡がまた少し下がった。

メイドは何を言っているのだと言わんばかりに正面を向き直り素っ気なく答えた。

「それを考えるのが我が君、ティアル様のなさる事なのでは？」

碧い瞳の青年ティアルは玉座にがつくりと尻もちをつき、項垂れた。

「リユナス、その五人の兵をここに呼んで来てくれ。」

リユナスと呼ばれたメイドは「かしこまりました。」と一礼をし、玉座の間を出ていった。

誰もいなくなつた玉座の間でティアルは玉座に凭れ掛かり、薄汚れた天井を仰いで大きく深いため息を一つついた。

リユナスは外で待つ兵達を玉座の間へと招いた。

ある者は周囲を落ち着きなく見渡し、またある者は自分の主に謁見するというのは、踏ん返り返り不遜にも偉そうな態度で玉座の間へ

と歩を進めた。

しかし、落ち着きのなかった男も、踏ん返っていた男も皆一樣にティアールの前に立ち、背筋をすつと伸ばし姿勢を正した。それはティアールが王の威風を放っていたからだ。

玉座の間は埃まみれで、壁や床、天井までもが最近修理を施した様な継ぎ接ぎだらけの有り様で、窓ガラスが汚れているせいか、射し込む陽の光もどこか陰って見える。

玉座も施された装飾が錆びていて、生地も所々解れていた。けれど、そこに座る若き王の凜とした姿は草臥れた玉座の間にありながらもその威容を少しも損なう事はなかったのである。

ティアールは神々しいばかりの碧い瞳をまっすぐに五人の兵士へと向けた。

五人の兵士は固唾を飲んで王の言葉を待った。

「一人ずつ、名前と階級を申せ。」

ティアールが言葉を発すると、踏ん返っていた男が一步前に進み出て我先にと名乗りを上げた。

「はっ、私はギリアム・マクウェルと申します。」

「階級は百人長です。」

「先日のイルニアの戦いにて敵国の千人長を斬る手柄を……」

「もうよい、次。」

ギリアムは言葉を遮られ、喉を鳴らし不満気な表情を露わにしたが、ティアールに一瞥され一步下がった。



次に名乗りでたのは五人の中で最も大柄な男であった。

男は不必要に胸を張り、自分を大きく見せながら、その体格に似合  
いの太く低い声で名乗った。

「俺はゴレス・バグノル、元傭兵ですので階級はありません。」

「しかし、腕っ節は誰にも負けません。」

そして次々に名乗りを上げ、一番最後に最も小柄な男が一步前に進  
み名乗りを上げた。

男は華奢な体格で女性の様に愛らしい顔立ちをしており、戦場には  
似合いそうもなかった。

綺麗に整えた、細い栗色の髪がひらりと揺れている。

「僕の名前はアル・サージェンです。」

「階級はありません、戦地に赴いた事はないもので……。」

アルがそう言うのと他の四人が小さく笑った。

アルは気にする様子もなく、その純真無垢な眼差しをティアルに  
向けた。

ティアルはその後、名乗った順に一人ずつ自室に招いて話をした。  
最後にアルの番がやってきて、緊張を解す様にゆっくりと深い深呼吸  
を一つしてティアルの部屋へと入ろうとした。

すると、ドアノブに手をかけようとした時、ギリアムがアルの肩を  
掴んだ。

「戦場に出た事もないお坊ちゃん、血を見る前に引き返した方が  
いいんじゃないか？」

アルは毅然とした態度でその手を振り払い、「御忠告どうも」と嫌  
味を込めた言葉と一礼をギリアムにくれた。

後ろでギリウムが舌打ちをしたのが聞こえ、それに返事をする様に、ふんと鼻を鳴らし手を置かれていた肩を軽く叩き、気を取り直してドアノブに手をかけた。

「アル・サージェン、入ります。」

ティアールは揺り椅子で寛ぎながら、視線だけをアルに向け。

質素な椅子を指差し、「座れ。」と促した。

傲慢な態度でありながらも、ティアールの外見にはあまりに似合いの態度なだけに不思議と不快感は覚えない。

アルは礼儀正しく敬礼をしてから、ティアールが首を縦に振るのを確認して漸く席に腰かけた。

「2つだけ質問する。」

「その問いに簡潔に答えろ。」

「まずは初めの問いだ。」

「先の皇帝より千国宣言を発せられ、帝位を狙う千の王の内から最弱の私の配下になった貴様の率直な感想を述べろ。」

アルは律義にも席を立ち胸に手を当て、ティアールに最上の礼を尽くして答えた。

「恐れながら、チャンスだと思いました。」

「僕のように若く、見た目も軟弱では歴戦の勇将の元では永久に兵卒のままでしょうから。」

「しかし、私の元では死ぬ確率は飛躍的に高まるぞ。」

「腕に覚えはあります。」

「千の矢に射られようと、万の兵に囲まれようと生き抜き、功を立てて見せます。」

儂げなその外見からは及びもつかない自信に満ち溢れた言葉だった。しかし、亜麻色の瞳から迸る眼光には確かな決意が感じられた。ティアルはその眼光を受け、しばし見返して嘲笑した。

「大した自信だな。」

「それでは次の問いだ。」

ティアルは大袈裟に言葉に間を置いた。

それまでの空気がその間によって、急激に変わる様に感じられた。それは冷気が足元から滲み上がってくるような、そんな感触だった。不穏な空気を切り裂く様にティアルが溜めていた言葉を吐き出した。

「先程の四人を殺せ。」

アルは動揺する素振りを露わにする事はなかったが、心は大きく揺さ振られていた。

いきなり仲間を殺せと言われたのだから、無理からぬ事だ。唇が小刻みに震え様とするのを嚥んで、動揺を噛み殺した。

「それは問いではありませんが……」

精一杯の返答であつた。

自分を凝視するティアルの碧い瞳に動揺し、一瞬声が上擦った。自分のすべてを見透かされているようなそんな気がしたのだ。

「それでは訂正しよう、問いではなく、命令だ。」

「奴らを殺せ。」

無表情で言い放つティアル。

その声は先程よりも少し低く、掠れた声だった。

漆黒の髪がさらりと落ち、顔に掛かったが瞬き一つせずにアルの瞳をまっすぐに見やる。

アルは耐えかねて、緊張を吐き出すように静かに長く息を吐いた。

「我が君の……仰せのままに。」

跪き、胸に手を当てて顔を伏せた。

次の瞬間、素早く立ち上がり、顔を伏せたまま出口の扉へと振り向き、顔を上げて出口の扉を睨みつけながら腰に携えた剣の柄に手を掛けた。

決意を固めたアルは大きな罪悪感に眉間に皺を寄せ、緊張感で高揚し頬には少し赤みが差していた。

右手に少し力を込め、腰の鞘から鈍く光る刀身を僅かに覗かせた。左手でドアノブに手をかけ、ゆっくりと捻る。

「冗談だ。」

後ろからの予想外の言葉に驚いて、ドアノブから手を離すと動揺で震えたアルの手に押された扉はそのままゆっくりと開かれた。

『冗談？ 何がだ？』状況が理解できずに恐る恐るティアルの方を振り向くと、悪戯小僧の様に屈託のない笑顔を浮かべるティアルがあった。

「恨みもなければ、殺す理由もない。」

「そんな奴等を殺せと命ずるはずもない。」

「だから言っただろう？ 問いだと。」

「貴様は俺の命令なら仲間を殺せるか？ と問っただけだ。」

「そんな……」

一転してアルの頬の紅潮は消え去り、青みが差したのは言うまでもない。

後悔とも、絶望とも異なるアルの不思議な表情にティアールは満足気に声を上げて笑った。

緊張の糸が切れたのか、アルはその場にへたり込んでしまった。

するとティアールが急に真剣な表情になり、掛けていた椅子から悠然と立ち上がり、己を包む黒衣をはためかせた。

腰から煌びやかに装飾された剣を素早く抜き、ゆるりとアルの肩に刀身を乗せた。

「問いの意味を答えよう。」

「貴様以外の四名の内、二人がすぐさま先ほどの命令に承諾した。」

「しかし、そんな輩は強き者に媚び諂う匹夫だ。」

「さらに他の二人はできかねると俺に許しを請うた。」

「されど、これはただの臆病者の所業。」

「私の求める者は迷い、葛藤し、それでも我が命を遂行し得る英雄だ。」

ティアールの言葉は少しずつ温かみを帯び、アルの心を包んでいった。

腰についていたアルは慌てて姿勢を正し、跪いて胸に手を当てて頭を垂れ、臣下の礼を尽くしながらティアールの言に耳を傾けた。

「アル・サージェンに命ずる。」

「貴様を我が軍の將軍に据える、私と栄枯盛衰を共にせよ。」

これが脆弱の王「ティアル」と、運命を共にする薄弱の將軍「アル」との出会いであつた。

この二人が歴史を大きく揺り動かす存在と成つて行くのは、まだまだ先の話。

## 第二話

アルがティアールに仕官してから数日が過ぎた。

他の仕官兵四名はティアールに酷く罵倒され、追い出されるようにして去って行った。

「全部で五名しかいなかった兵を自分を残し何故全員追い出すのか？」と聞くとティアールは憎たらしく微笑み「五人しかないなかったからだ、一人も五人もそう変わるまい。」と人事の様に言った。

「貴様は打ち筋が愚直すぎるな、敵の裏を掻き、弱みに付け入る事を覚える。」

アルから奪ったボードゲームの駒を左手で遊びながらティアールが言った。

アルは齒軋りをしながら盤面をひたすらに睨み付けている。

これでティアールの連勝記録が50を数えたのだから当然である。すると二人の間にリュナスが割り込み、盤を勢いよく引っくり返した。

「リュ、リュナス！ 貴様、一体なにを……」

言いかけてティアールは口を噤んだ。

リュナスの眉間には皺が寄っており、いつも以上の仏頂面をティアールに向けたからだ。

普段滅多に感情を表に出す事のない、彼女が一目見れば分かるほどに苛立っている。

ティアールはわざとらしく口笛を吹く素振りをするが、音が鳴って

いない。

仕方がないので声で「ぴゅーぴゅー」と言った。

アルは床に散らばった駒と盤を拾い上げて、そつとその場を離れようとしたが、後ろ襟をリユナスに掴まれ、ティアールと並べ座わらされた。

不機嫌なリユナスの顔を二人が恐る恐る見上げると端の吊り上った眼鏡のレンズをギリリと光らせて、「何か？」と一喝されたので、すぐに顔を背けた。

わざとらしく鼻を鳴らし、不機嫌そうに黙していたリユナスが遂に口を開いた。

「お二人は毎日毎日毎日……そのように遊んでいらつしゃいますが、お二人が召し上がる食事、衣服その他諸々は振って沸いて出てきているではありませんよ。」

ティアールは幼子の様に口を尖らせ、「そんな事は分かっている。」

と消え入りそうな声で言ったがリユナスは「だまらつしゃい。」と即座に吐き捨てた。

傍から見れば、王と臣下には決して見えないであろう、異様な光景であった。

「そ、それでリユナスさんは一体何がおつしゃりたいのですか？」

不穏な空気を変える様に努めて明るい声調でアルが二人の間に割って入った。

リユナスはぴくりとその言葉に反応してから、小さく口を動かした。

「……もう……ません。」

「何を言っている？ 聞こえないではないか。」



「お金も、糧食ももうありません！」

二人はしばらく呆けてから声を揃えて驚きの奇声を上げた。

しかし、考えれば当たり前の話なのである。

通常、国は領地を統治する事により、民から税を徴収し、それを糧とするもののだが、ティアールの国は国とは名ばかりで、領地は草臥れた小さな城一つであり、もちろん民はいない。

民がいなければ、税はどこからも出るわけもなく、結果は至極当然の如く今の状況である。

「ティアール様、いかがなさるおつもりですか？」

棘のある言い方だが、リユナスの怒りも当然であり、さすがのティアールも言い返すこともできず腕を組み困惑の表情を浮かべる。  
そして、しばらく思案した後にティアールはアルに「出掛けるぞ」と声を掛け、支度をさせた。

出掛ける先は隣国である、862位王位継承者「マカス」の統治する街「アブニア」であった。

隣国とは言っても、ティアールの居城はマカスの所領内アブニアの外れに在ったのでアブニアの中心部まではそう遠くない道程である。  
アブニア中心部に到着したティアールは手慣れた様子で上等の絹を敷き、その上にアルに命じてかき集めさせた城内の瓶に井戸の水を入れたものを並べた。

「ティアール様、この瓶を売るつもりなのでしょうが、こんな物欲しがる者はいないのでは？」

「貴様は世の中の道理を知らないな。」

「ならば売れる物とは何か？」

この期に及んでもまだ威張り散らしながら言うティアールに少し呆れながらも瓶を並べながらアルは考えた。

「それは価値のある物でしょう？」

「では価値のある物とは何だ？」

「金とか、宝石とかそう言った物ではないでしょうか。」

「うつけ者め、価値ある物とは人が欲する物であり、金銀財宝ではないわ。」

「でも金銀財宝は皆欲しがるではないですか。」

少し呆れた様に「いいから見ておれ。」とアルを押しつけて、並べた瓶を一つ手に持ち大声を張り上げた。

「よってらっしゃい見てらっしゃい、これは魔法の小瓶だ。」

「この中に入っている水には若返りの効果があるのだ。」

突然何を言い出すのかと一番驚いたのはアルだった。

街の人々は不可解な事を騒ぎ始めた青年を面白いもの見たさに詰め寄ってきた。

口々に「どうせインチキだろう」「何が始まるんだ」と呟き、冷やかしの目的で買う気など毛頭ない。

「嗅いでみてくれ、この匂い。」

「芳しい魔法の匂いがするだろう？」

「どうせインチキだろう？　香水が何かを数滴混ぜただけの物に違いない。」

街人の男が大声で野次を飛ばす。

しかし、その男の言う通り、リユナスの香水を数滴ずつ水の中に混ぜ込んだだけの物だ。

リユナスが大層気に入っている香水らしく、かなり洩ったが二人で頼み込んで分けてもらった物なのだが、あっさりと見破られてしまい、アルの額にはにわかに嫌な汗が滲んだ。

「馬鹿を言っではいけないな。」

「ならばこの色を見よ、薄っすらと青みがかっていて美しい色だろう？　これが証拠だ。」

依然として自信満々のティールだから不思議だ。

「それは化粧に使う粉じゃないか、私は前にコップの水にこぼした事があるけれど、確かにそんな色が出ていたよ。」

その色のからくりもあっさりと見破られた。

これもしユナスの物をこっそりと拝借して混ぜた化粧粉である。さすがに香水とさらに化粧粉ともなると叱られそうなので、黙って拝借して混ぜたのだった。

「まったく、ここの街人は疑り深いな……。」

こんな怪しい品を疑わない者など居る訳がないだろうと、アルは心の中で呟いた。

「ならばこの男が生き証人だ。」

ティアールが高らかに宣言して、アルを指差した。  
人々の視線がアルに集中し、アルは目をぱちくりとさせた。

「その方、ここに居る男の齢はいくつだと思っね？」

「14、5でしょう。」

迷いなく答える老婆、街人は皆一様に同意したように首を縦に振った。

ティアールの口元に笑みがこぼれた。

「この男はこの若返りの薬を飲んだのだ。」

「見ての通り、14、5に見えるこの男だがその齢はなんと……24！」

その瞬間に街人達は騒然となった。

ティアールは誇らしげにアルの国民証を街人達にひけらかした。

国民証とは帝国より、国民一人一人に交付された物で、そこにはその人間の細かな情報が書き連ねられており、その内容は偽る事などできない物だ。

事実、アルの齢は24である。

しかし、その風貌は乙女の様で童顔な顔立ちはとてもではないが24に見えるものではない。

騒然となる街人達の中から若い女性が「買います、売って下さい。」と声を上げた。

すると街人達は競って「俺も」「私も」とティアールとアルの元に人が群がり、インチキの小瓶は瞬く間に売切れてしまった。

帰り支度を整え、金貨の詰まった袋を携え、城へと向かう二人に後ろからリユナスが声をかけた。

「一番最初に魔法の小瓶を売ってくれ、と叫んだ声の主はリユナスだったのである。」

一体何故自分を見ただけで、それまで疑っていた街人達が競って小瓶を求めたのか理解できないといった様子のアルにティアールが自慢げに言った。

「人は分かりやすい嘘を見破った後には、真実の混じった巧妙な嘘を見破れない。」

「覚えておくといい。」

そしてティアールは最初に自分を騙した時に見せた、悪戯小僧の様な笑顔を向けた。

### 第三話

豪勢な一室で食事をする太った醜惡な男がいた。

度々料理を床にこぼしながらむしゃぶりつく様に食を進める。

太った男は名を「マカス」と言った。

862位王位継承者であり、称号は強欲。

強欲の王マカス、アブニア領の領主である。

食事で衣服を汚したマカスとは対照的に美しく豊満な身体をし、妖艶な美貌を放つ金髪の女兵士が傍らに侍っていた。

彼女の名はエルノア。

マカス軍の將軍である。

エルノアはマカスの前に跪き、弾力のありそうな厚く艶やかな唇から色気のある声を発した。

「マカス様。実は城下で魔法の薬が入った瓶と偽り、紛い物を街人に売りつけた者がいまして……」

「売りつけられたのは下級民か、上級民か？」

「上級民にございます。」

「ならば、即刻ひっ捕らえて斬ればよろう。」

「その様な瑣末な事を逐一私に報告する事もないわ。」

一見豊かで平和に見えるアブニアだが、マカスは民を上級民と下級民とに分け、上級民からは軽い税を取り、下級民からは大変重い税を取っていた。

上級民は豊かな暮らしを送り、賑やかで豊かなアッパー街に住み、下級民は大変辛い暮らしを強いられていて、不衛生で腐敗したダウ

ン街に居住している格差が激しい地なのである。

「しかし、その詐欺師なのですが……」

アブニアでひと稼ぎしたティアールとアルはその後、化粧粉を勝手に使った事がリユナスに知れ、罰として洗濯当番をさせられていたアルはともかく、ティアールの手つきは酷いもので、二着ほど衣服を駄目にしてしまった。

「ティアール様、またリユナスさんに叱られますよ。」

「そもそも何故、王である私がこんな事をしなければならないのだ。」

「そして何故、己の家臣に罰を与えられなければならないのだ？」

「そう言われてみれば確かにそうなのですが、リユナスさんって普段無口で大人しいですが、怒らせると恐ろしいですから、言いつけ通りしっかりやらないとまた叱られてしまいますよ。」

一度は手を止めて、放り出そうとしたティアールであったが、彼もリユナスが恐ろしかったのか、再び慣れない手つきで洗濯をし始めた。

一通り貯まった洗濯物を片づけ終わる頃、二人の様子を見にリユナスがやってきた。

ティアールが駄目にしてしまった衣服を横目で見て少し怪訝そうな顔をし、いつもの様にすぐにずれてしまう眼鏡を中指で押し上げながら、それには構わず何やらティアールに耳打ちをした。

「そうか、領民を騙して金をせしめたのがマカスにばれてしまったか、それは大変だ。」

「そうになると、攻める口実を得たマカスはすぐにでも我が城に攻めてくるであろうな。」

何が面白いのか、ティアールは不気味な笑みを浮かべている。  
リユナスはいつもと変わらぬ様子で淡々とさらに報告を続ける。

「マカス軍の勢力は歩兵三千、騎馬兵が千ほどです。」

「兵士は皆、戦の経験のない弱兵ばかりですが、我が軍はその戦の経験がない弱兵が1名ですから、正面から戦っては当たり前ですが、負けますね。」

「ティアール様、何をヘラヘラしていらっしゃるのですか？ リユナスさんは何を落ち着いていらっしゃるのですか？」

「大変な事態ではないですか。」

「うむ、とても大変な事態だ。」

「しかし、我が軍には千の矢に射られても、万の兵に囲まれても手柄を立てると息巻いた大將軍がいらっしゃるから安心だな。」

「あ、あれは、物の喩えというやつで……、ってふざけている場合ではありませんよ。」

声を上げて笑うティアールに顔を真っ赤にしてアルが迫った所でリユナスが大きな咳払いをして二人のじゃれ合いを制止した。

「何が大変な事態ですか、あえて仕掛けた張本人が。」

「え？ そうなのですか？」



「まあな、面倒臭がり屋な肥満の王に口実を与えてやったただけだ。」  
「だけど万の兵と言うほどではないが、数千の兵とは貴様一人で対峙してもらうのは本当だぞ。」

ティアールが不敵にニヤリと笑った。

この王様はどこまでが本気でどこまでが嘘なのかわからない。

アルは心からそう思った。

しかし、心の片隅では闘士の炎が燃え始めていた。

初陣の戦が己一人対四千の兵なのだ。

普通の者ならただ怯えるだけなのだろうが、アルは違った。

恐怖に駆られながらも、確証はないが信じていた。

自分の主である、この男が戦をすると決めたのであればそれは勝ち戦になるであろうと。

それから二日の後にマクス軍の將軍エルノアは四千の兵を引き連れて出兵した。

自領内にあるティアールの城までは半時ほどあれば十分である。

まだ朝霧の晴れぬ中をゆっくり行軍する。

エルノアは油断などしていなかったが、急ぎ奇襲をかける相手ではない。

兵のいない城を攻めるのに、無駄に急ぐ必要がなかったただけであった。

兵士達も今から戦地に赴くというのに、不謹慎にも顔が綻んでいる。村の外れの林道を抜ければ、ティアールの居城が見えてくる。

その一本道の林道に差しかった時だった。

林道の出口に一人の男が両手に二本の長槍を携えて、道を塞ぐ様に仁王立ちしている。

エルノアは手を上げて、兵達の行軍を制止した。

「貴様は何者だ、道を開けよ。」

男は答えない。

エルノアは馬の鞍に掛かっていた弓を持ち、矢を番えた。

「退かねば、射るぞ。」

エルノアは弦を目一杯に引き絞った。

「これが最期だ。」

二呼吸ほどの沈黙の後、エルノアは男の眉間目がけて矢を放った。

高速で飛来する矢は男の眉間に寸分違わず飛んできたが、命中するかと思われた瞬間、男は持っていた槍で己に向かって飛んでくる矢を目にも止まらぬ速さで叩き落とした。

叩き落とされた矢は男の足元に突き刺さり、小刻みに振動していた。

それを見た兵士達の顔から笑みが消えた。

男の動きはそれ程に常識離れしていた。

エルノアの強弓から放たれる矢の速さと威力の凄まじさは兵卒から隊長まですべてが知る所であり、その激烈な矢を叩き落した目の前の男は、自分達には計り知れない程の武力を秘めているのだと気付かせた。

「私はマカス軍の将、エルノア・パゾル。」

「武芸に秀でた英雄とお見受けする。」

「突然、矢を放った無礼はお詫びしよう。」

「しかしながら、我らは戦場への行軍中ゆえ、道を譲っては下さら

ぬか。」

それまで黙っていた男は真つ直ぐにエルノアを見返した。  
栗色の毛髪、亜麻色の瞳をした天女のように美しい顔立ちの男に歴戦の勇将であるエルノアも一時、目を奪われた。

「道を譲るわけにはいきません。」

「先程の激烈な矢と礼を尽くした仁義を重んじる態度、貴殿も優れた勇将とお見受け致します。」

「まさか暗君であるマカス王の下に貴殿のような英雄がいるとは思いません、名乗らなかった非礼をお詫び致します。」

「僕はアル・サージエン。」

「ティアル様に仕える將軍です。」

エルノアの顔つきが強張った。

すぐに周囲を見渡し、伏兵がいるのかと疑ったが、その気配は感じられない。

しかし、眼前の男は臆する様子もなく、堂々と自軍の前に立ちふさがっている。

「アル・サージエン、まさかとは思いますが貴殿一人で、我が四千の兵を相手にすると言うのか？」

「そのまさか、ですよ。エルノア・パゾル將軍。」

自信満面に言い放つアルにエルノアは余計に混乱した。

ただの一人では足止めにすらなりはしない。

忠義と呼ぶにも、その行為はあまりに無謀すぎる。

混乱するエルノアに不敵な笑みを浮かべるアルだったが、背筋に冷

ややかな汗が一筋流れていた。

## 第四話

大群の前に単身立ちふさがる一人の男。

もはや、その異様な光景だけで人々に伝説の英雄と呼ばれ、歴史に名を刻むであろう。

『ティール様、僕、絶対死んじやいますよ。』

と英雄は心中で思ったが、それは人々にも、歴史にも語られる事はない。

エルノアが手を上げ、兵を動かそうとしたその時、アルは携えた二本の長槍をエルノアの軍勢目がけて投擲した。

二本の槍はマカス軍の先頭に立つ兵を差し貫いた。

稲妻の様に飛来した槍の速さと威力に全軍が恐れ慄いた。

エルノアも上げた手を振りおろせず、驚きを隠せなかった。

『本当にこの男は四千の兵に匹敵する力があるのではないか？』

一瞬、そんな不安がエルノアの脳裏を過った。

もちろん、一人の青年にそこまでの力がない事は普通に考えればすぐに気付く。

しかし、状況が最早普通とはかけ離れていた。

四千の兵の前に立ちふさがる一人の男。

そしてその大群を嘲笑い、挑発するかの様な先制攻撃。

エルノアの決断を鈍らせるには十分に不気味な状況だった。

この状況を作り出したのは他でもないティールだった。

アルは出陣前、ティールに詳細な指示を受けていたのだった。

「いいか、貴様は必ずこの林道の出入り口で奴らを迎え撃つのだ。」

「出来る限り自信満々に、堂々と振る舞え。」

「敵国の將軍エルノアは若いながらも優秀な指揮官だ。」

「お前が堂々としていればしているほどに、伏兵を警戒して安易に兵を進めたりはしない。」

「この城を攻めるにはこの林道を通るしかなく、伏兵を配置するには最適の場所だからな。」

「優秀な指揮官であればあるほど警戒する。」

「しかし、そのまま永遠に立ち往生してくれるほど甘くはない。」

「相手が進軍しようとしたら、すぐに先制攻撃を仕掛けを機先を挫け。」

「そうすればエルノアは必ず一度、進軍を止める。」

まさにティアールの言う通りに事が進んだのだ。

アルは自分の仕えている男は未来を見通す人外の実在者ではないかと想像し、身震いした。

しかし、ティアールに授かった策もすでに尽きたいた。

「後は適当に戦って危なくなったら逃げろ」とティアールは言ったが、自分が逃げてしまえば城は落ちてしまう。

ここからがアルの腕の見せ所である。

エルノアは自分の頬を両手で挟み込むように叩いた。

『何を迷っている、ティアールは脆弱の王。』

『伏兵を用意できるような戦力などない。』

『アル・サージェスにもし四千の兵に匹敵するほどの武力があるのなら、すぐに攻め込んでくるはず、いいや、そもそもそんな事あり得はしない。』

そこでエルノアはやっと気がつく、最初から全てがただのブラフである事に。

後悔するよりも先に慌てて兵を進めた。

アルはエルノアが兵を進めるのを見計らって勢いよく飛び出し、腰に携えた左右の鞘から刀剣をすらりと抜いた。

二刀を振り回し、一拳に三つの首が宙を舞った。

舞いを興じるかの様に旋風の如く兵達の命を刈り取っていくアルに、前線の兵は戦慄を覚え、足を止めた。

前の兵が急に足を止めた為に狭い林道で縦列を組んでいた兵達は互いにぶつかり合い混乱に陥った。

後ろの味方に押され、武器を構える事もままならぬ兵達は次々にアルに斬り殺された。

「落ち着け、落ち着くのだ！」

「敵は一人だ、落ち着き、取り囲んで仕留めるのだ！」

それでも落ち着きを取り戻さない兵を見るや否や、エルノアは手近に居た一人の兵を斬った。

「恐れて騒ぐ者、逃亡する者、尻込みする者、例外なくすべて斬る。」

エルノアは恐怖により混乱に陥った自軍を、恐怖により瞬く間に収めた。

冷静さを取り戻した兵達はアルを取り囲み、長槍で遠間から攻撃する。

素早くかわすが避け切れず脚や肩を刃先が掠り、血が滲む。

そして動きを止まってしまったアルを兵達は四方八方より一斉に突きかかった。

アルは致命傷になりそうな槍だけを受け流し、堪えた。

何とか致命傷を避けたものの、数本の槍が四肢に突き刺さり、激痛が奔った。

アルは最後の力を振り絞り兵を一人切り伏せたが、遂には力尽き、その場に倒れ込んでしまった。

「本当にたった一人で我が軍を止めようとするとはな。」

「このエルノア・パゾル。」

「貴殿の如き英雄を生涯忘れぬと誓おう。」

エルノアが両手で剣を持ち直し、倒れているアルの延髄にその狙いを定めた。

アルは静かに目を瞑った。

「やり残したことは数多あれど、後悔はない。」

「ティール様、初陣にて死せる不忠な僕をお許し下さい。」



## 第五話

エルノアは研ぎ澄まされた細剣を持つ手に一層力を込め、小さく気を吐いた。

美麗な金の髪が少しだけ宙に浮き上がり、細剣がアルの延髄目掛けて振り下ろされた瞬間。

「そこまでだ！ 武器を捨てて投降せよ！」

エルノアは細剣を寸での所で止めた。

そして声の聞こえた後方を振り向くと黒衣にその身を包ん男が木々の間から差し込む光に漆黒の髪を鈍く光らせ、その口元には微かに笑みを浮かべて立っていた。

エルノアの美しく妖艶な口元に苛立ちの色が滲んだ。

「何のつもりだ。」

「投降するのは貴様だ……、脆弱の王、ティアル。」

アルは慌ててティアルに逃げるよう訴えたが、ティアルは笑みを湛え、その場を動く気配はなかった。

「いいや、投降するのは貴殿だ、エルノア・パゾル將軍。」

「貴殿の主君マカスは朽ちゆく城とその運命を共にした。」

「嘘を言うな、貴様に我が城を落とす兵力などあるはずはない！」  
「そんな虚言に騙されると思っっているのか！」

不敵に笑うティアルにより一層苛立ちの色を深め、怒りを露に怒声を飛ばした。

ティアルは右手で自分の蒼い瞳を覆うようにして、緩んでいた口元を大きく開き、大笑いした。

「何が可らしい！ この詐欺師め！」顔を紅潮させ、美しい髪を振り乱してエルノアがティアルに再び怒声を放つ。

ティアルは笑うのを止め、顔にかざした指の隙間から冷徹な眼差しを向けた。

「私に兵力はないと言ったね？」

「確かにその通りだ。」

「けれど、貴殿達の敵が私だけだと思いか？」

エルノアの怒りに歪んでいた顔が、見る見るうちに青褪め絶望の表情に変貌していった。

「まさか……」

その手に持っていた細剣を地に落とし、膝を落とした。

「さすが、名将と誉れ高きエルノア・パゾル將軍だ。」

「ご明察の通り、城を落としたの貴殿達の領地に住まう者達だ。」

「貴殿達が蔑んできた下級民達の反乱により、城は焼かれ、マカスは死んだ。」

勝ち誇り、ティアルは一つずつ種明かしをしていた。

ティアルは以前からアブニアの下級民達と身分を隠し、接点を持ち、その怒りを助長する事に尽力していた。

やがて下級民のほぼすべてがマカスに大きな憎しみを抱き、反抗勢力を組織し、城を陥落させられるだけの規模に成長するのを見計らい、マカスに自分の城を攻める口実を与えた。

兵が出兵し、手薄になった時に反抗勢力を決起させ、指揮を執り瞬く間に城を陥落させたのであった。

すべてを説明し終えたティアルはまたも満足気に大笑いした。

「君達の失敗は数多いが、その中でも一番は最大の敵を最も傍に置いてきた事だ。」

一人の兵が呟いた。

「下級民でもアブニアの民だ、そいつらと戦うなんて考えられないよ……」

それに続く様にして一人、また一人と呟いた。

「俺だって、元は下級民でマカスの気紛れで上級民になれただけだ……」  
「俺は下級民の友達がいるんだ……」

兵達が次々とその手から武器を落とした。

今からでも城を奪い返す事のできる兵力は残っていたが、ほとんどが上級民で構成されている彼等とて、下級民を虐げる事は本意ではなくマカスに強いられていただけであった。

さらには横暴なマカスに忠誠心を持つている者もなく、マカス亡き後戦う意味を持つ者は皆無であった。

しばらくして、力なくその場に膝をついていたエルノアだったが、足元に転がる細剣を拾い上げ、ティアールへとゆっくりと歩を進めた。

アルが急いで二人の間に割っては入ろうとするのを、ティアールが目で制止した。

エルノアは細剣をティアールの前に突き立て、その場に腰を落とした。

「私を斬るがいい。」

「しかし、ここに居る兵達や、上級民達はマカス様に強いられていただけでそなたや、下級民に悪意を持つ者などいない。」

「この首に大した価値などないかもしれぬが、それで兵や上級民達を許してはくれまいか。」

「貴様の首に価値などないわ……」

小さく呟いて、突き立てられた細剣を抜き、構えた。

承諾などしていないティールに「感謝する。」と小さく呟いてエルノアは目を閉じた。

その口元は心なしか、少し綻んでいる様に見えた。

一陣の突風が巻き起こり、甲高い風斬り音と共に細剣が振り下ろされ、エルノアの美しく長い金髪が大きく揺れた。

エルノアの首は胴から離れず残ったままだった。

金色の髪だけが地面にはらはらと落ちる。

首筋に付き立てられた細剣はそのまま下がり、エルノアの薄い肩にそつと乗せられた。

「貴様の首に価値はないが、生きている貴様に如何なる物にも代え難い価値がある。」

「私に仕え、アルを補佐せよ。」

「エルノア・パゾルをアル・サージェン將軍の副官とす。」

「……励め。」

そう言つて、細剣をエルノアの前に突き立て、黒衣を大きく一度はためかせて、身を翻した。

エルノアは細剣を再び手に取り、己の髪を掴んでティールに斬ら

れた辺りまで切り取った。

そして細剣を鞘に戻し、去りゆくティアールに膝をつき頭を垂れ、  
「はっ。」と短い返事をした。

様子を見ていた四千の兵達も同じように跪き、自分達の新たな王を敬意を表した。

その後、ティアールはアル、エルノアとさらには四千の兵を引き連れアブニアへと凱旋した。

兵達と同じくマカスに不満を持っていた上級民と、今まで虐げられてきた下級民とが手を取り合い、心を共にして、脆弱の王ティアールの凱旋を祝した。

人々の顔は晴々としており、その表情には希望があった。

そんな風景を感涙に顔を汚しながら見ていたアルの肩にティアールが手を置いた。

「遅れてすまなかった。」

「もう少しで私は大事な臣下を失うところであつた。」

いい歳をして子供の様に、アルが声を上げて泣いた。

先ほどまで四千の兵に一人で対していた男とは思えない姿であつたが、エルノアや、兵達は既に心に決めていた。

この情けなくも強く、勇敢な將軍にどこまでも付き従おうと。

## 第六話

「この、裏切り者の売国奴。」

エルノアの白銀の鎧を飛礫が打った。

彼女は凱旋するとすぐに大臣以下数名の者達を捕らえた。

悪政を布いていたとはいえ、ごく一部の上級民の中には確かに甘い汁を吸っていた者も多かった。

大臣とその他少数の奸臣達を除かなければ遺恨が残ってしまう。

思い立ったエルノアはすぐさま彼らを捕らえたのだった。

奸臣達は口を揃えてエルノアを罵倒した。

心優しい彼女の心中は穏やかでいらなかった。

邪な者達とはいえ、元は同じ者に仕えた仲間達であつた事は事実であつたのだから無理もない事だ。

「……これで全員です。」

対抗勢力のリーダー格の男がエルノアに簡潔に報告をした。

呪いの言葉を吐き続ける大臣の首元へ、すらりと細剣を近づけた。

「何とでも言うがいい。」

「甘んじて裏切り者の汚名を着よう。」

首元に添えられた細剣を振り上げ、一気呵成に振り下ろした。

鮮血が飛び散り彼女の頬を汚した。

そして他の兵達に命じ、次々と奸臣達を全員斬首したのだった。

醜悪に肥え太った奸臣達の遺体を急いで処理させ、城に捕らえられていた下級民の家族達を解放した。

下級民の女達が家族と再会するのを見て、己の艶やかな唇を噛み締

める。

ふつくらとした唇からは一筋の血が流れて、返り血と交わった。裏切りの汚名と自分の犯してきた罪に胸がずきずきと痛む。

「すまない、後はまかせた。」

後をリーダー格の男に任せ、彼女はかつての王がいた玉座の間へと歩を進めた。

玉座は倒れ、荒れ果てた部屋に敷かれた紅い絨毯の上はさらに濃い黒ずんだ朱で染められていた。

その朱の染みは、ここでもかつての主が事切れた事を物語るように広がっており、すでに遺体はないがはっきりとその情景は瞼の裏に浮かんだ。

「私は生き長らえていてよいだろうか。」

「かつては大勢の者を不幸にし、今は裏切り者の汚名を着て、それでも生きていて……」

大粒の涙が、大きく美しい瞳から溢れ、鮮血に染まった頬を流れた。鎧を脱ぎ去り、その場に散らして地面を叩いた。

彼女とて、以前からマカスの悪政に不満はあった。

けれど自分が一度仕えた者に逆らうのは彼女の性格からすれば、あり得ない事だ。

蹲り、声も上げずに涙を流す彼女の肩を誰かが叩いた。

振り返ると眼鏡をかけた白銀の髪を綺麗に纏めた召使姿の美しい女性立っていた。

「その涙は後悔の涙か？ それとも使者への弔いの涙なのか？」

冷たい言葉と表情の裏に不思議と温かみを感じる。

「いずれでもないさ……ただの感傷だ。」

「敗戦の将にはお似合いだろう?」

「貴方はすでに敗軍の将ではないわ。」

「私にも貴方と同じような経験があるから理解はできるけれど、涙を流すのは最後になさい。」

「裏切り者に裏切った者達を想って涙する事など許されはしないのだから。」

突き放す様にぶつけられた言葉だったが、優しく慰められるよりも遙かに心の重みを取り除いてくれる。

召使の女が去った後にしばらくすると、エルノアはゆっくりと立ち上がった。

斬った者の血を拭わぬまま収めたからか、少し抜くのに抵抗を感じる細剣を勢いよく引き抜いた。

すでに陽は落ちて絨毯を染め上げた朱はその闇に混じって見なくなつた。

薄っすらと月明かりが射し、外で開かれている宴の笑い声が聞こえてくる。

エルノアの細剣は將軍に任じられた時にマカスに賜った物だった。細剣を勢いよく玉座へと突き立てた。

深々とその刀身が見えなくなるほどに。

外に出ると酒に酔ったアルが鎧を脱ぎ捨て、肌を露出したエルノアに頬を染めながら近づいてきた。

「なんて格好してるんれすか。」

「何はともあれ、今日からよろしくおねがいします。」

呂律の回らないアルはそのままエルノアの方へと倒れこんだ。



抱きとめると、想像以上に細い身体に驚いた。

乙女のような容姿に細い身体。

昼間とは別人の様なだらしなない姿。

エルノアの口元に少しだけ、笑みが宿った。

「僕は今回が初陣でしたし、エルノアさんの気持ちを理解できるほど人生経験が豊かではありませんが、人は痛みを乗り越えられるものとだと知っています。」

「これからは、僕が傍にいます……す……から。」

相当に飲まされたのだろうか、傷が深かったせいで酔いがまわるが早かったのだろうか、アルはエルノアのふくよかな胸の中で眠りかけてしまった。

膝に寝かしつけて、栗色の髪を撫でて、小さく微笑んだ。

「傍に付き従うのは、私の方ですよ。將軍。」

「なんだ、なんだいい雰囲気ではないか。」

今度は足元がおぼつかず、目の据わっているティアールが酒瓶を振り回してやってきた。

倒れるようにエルノアの横に腰かけた。

自慢の黒衣の胸元ははだけて、白い肌が覗いている。

月を見上げる彼の王の蒼い瞳は、昼間目の当たりにした残忍な蒼い瞳とは対称的な優しい色に染まっていた。

「私を残酷な王と思うか？」

「何故、そなたの命を取らなかったのか、と。」

酒に酔っているのか、優しさに悲しみの色を混ぜ込んだ瞳で思いも

つかない言葉を小さく口にした。  
驚いて言葉が出ず、首だけを振る。

「襟に血が残っているぞ。」

「私はそなたがここに来る前に何をしてきたか知っている。」

「と、言うよりもそなたの性格からして、その行動に出る事を知っていて止めなかった。」

「いや、と言うよりもやらせたわけだ。」

「それでも残酷ではない、と？」

さらに強く少女の様に首を振った。

月を見上げていた王はゆっくりとその眼差しを自分に向けた。  
そして、短く刈り取られた己の髪を細く白い指先で撫でる。

「人は罪を背負う事があるが、その罪は一人の物ではない。」

「共に背負ってくれる者が必ず居る。」

「覚えておくといい……。」

だらしない表情をして、エルノアのふくよかな膝の上で眠りこける自分の腹心に視線を落とし、呟いた。

しばしの沈黙の後、その腹心の鼻を軽く弾き、悪戯小僧の様な笑みを浮かべて王はその場を後にした。

エルノアは姿勢をそのままで胸に手を当てて、頭を軽く傾けた。

金色の髪がさらさらと揺れて、月明かりが乱反射した。

彼女の瞳には再び熱いものが込み上げた。

「これで、これで本当に最後。」彼女は胸に当てた手を一層強く押し付けて、小さく呟いた。

「……ティアル様。」

「わかっている。」

「これで、アクシズ、ユリアーゼ、マトリアス、チエシャウが動く。」

優しさを含んでいた蒼い瞳は再び冷ややかな蒼に変わる。

彼の王は何を見るのか、月明かりの射す何処かを凝視した。

第一章 建国 完

## 第六話（後書き）

これにて一章は終幕です。

この一章は主要人物の出会いとティアールが領土を持つまでのお話で、ここままでプロローグの面を持っています。

二章以降は戦闘をメインに盛り上がりつつ執筆していきたいと思っています。

今後も速いペースで更新していきたいと思っていますのでご期待下さい。

## 第七話

「ティアールがマカスを降したか……」

豪華絢爛な玉座に腰掛、美しく広大な部屋に一人の老人と青年がいた。

両者共に華美な装飾の衣服を纏い、ただならぬ威光を放っていた。現皇帝、ゼノアムと第一位王位継承者、シュバイアであった。

「千位王位継承者とはいえ、奴は呪われし子。」

「恐れながら、この位の事は父帝も予想されていた事かと。」

厳格な表情を崩さず小さく笑みを浮かべるゼノアムだった。

ゼノアムは広いこの世界を大海をも越えて統一せしめた唯一の王であつた。

彼の皇帝は己が年老いた事に嘆き、ある命令を千人の息子達に発した。

「我が千の息子達よ、覇を競え。」

「そして、我と同じくこの世界を統一せしめた者が新たな皇帝である。」

彼の皇帝は千の息子に兵、領地、そして称号を与えた。

しかし、それらは決して平等ではなく、大勢の兵や領土を与えられた者もいれば、小さな古城一つしか与えられない者のいた。

「人の生とは不平等な物」と言うが皇帝の言い分であつた。

千の皇子達が厳格で偉大な父帝に逆らえるわけもなく、後に「千国宣言」と呼ばれる命令に従うしかなかったのである。

かくして、帝国の広大な領土は千の国に分けられ、皇帝ゼノアムは

己が帝都を第一位王位継承者、シュバイアへと譲り、皇子達の行く末を見守る観察者となった。

所変わって、エスカルナ地方。

アブニアはそのエスカルナ地方にあった。

エスカルナは帝都からは最も遠くに位置する偏狭の地である。

アブニアの東には第921位王位継承者、美麗な王ユリアーゼの治めるクツサラムの街、西には第877位王位継承者、冷徹な王アクシズが治めるヒューレンの街、南は第898位王位継承者、老練の王マトリアスが治めるゴダイの街があり、北には第775位王位継承者、矮小な王チェシャウの治めるコルナ口の街がある。

この五群でエスカルナは構成されていた。

彼の王達は下位の王位継承者であったが、同盟を結び、エスカルナを狙う他国の王を防いでいた。

「マカスのデブが死んだらしいじゃねえか。」

「なんでもあの唯一のサウザンドナンバーの脆弱にやられちゃったって話だ。」

釣り目の髪を逆立てた男が呆れ帰って悪態をついた。

矮小な王チェシャウである。

「チェシャウよ、君は相変わらず口が悪いな。」

「それに正確には脆弱に敗れたのではなく、下級民の反乱によるものだ。」

綺麗に整えられた長髪の男が髪を掻き揚げて気障にチェシュウの言を訂正する。

そう言ったのは美麗の王ユリアーゼ。

「しかし、それも脆弱の謀に拠るものらしいではないか。」

「やはりあの呪われた子は侮れぬ。」

落ち着いた様子で紅茶を啜りながら、四人の中で最も年老いた男が呟くように言う。

彼は老練の王マトリアスである。

そして三人の言を独り押し黙って聞く、白髪で色白の男がいた。彼が冷徹な王アクシズだ。

「まあ強欲な豚にはお似合いの最後だが、問題は脆弱をどうするかだ。」

彼らはエスカルナの一角を担っていたマカスが敗れた事により、今後の事を相談する為にチェシャウの居城へと集まっていた。

「私は脆弱と盟を結ぶ事を勧める。」

「マカスの兵達は弱兵とはいえ、戦力を消耗したくはないからね。」

「俺はもちろん、脆弱を潰す事を推すぜ。」

「後から出てきた奴に、しかもサウザンドナンバーに横から領地を掠め取られた、なんてもの笑いだぜ。」

徹底抗戦を推すチェシャウと、和平を推すユリアーゼの意見が真っ向から対立し、話が纏まらない。

この二人は正反対の性格上、意見が対立する事が多い。そう言った場合は大体マトリアスが話を纏める。

「二人の意見は分かった。」

「しかし、そう急いで和平か、交戦か決定する必要もあるまい。」

マトリアスが今後の策を話し始め、それにアクシズが同意した。いつも彼らの話し合いはこのようなようにして決着がつく。

最もいつもはアクシズと同じく、マカスが同意して三対一対一の格好であった。

「それじゃあ、親父殿の言う様にしますかね。」

「かいさくん。」

「……あさん！」

悪夢に魘され、大量の汗をかき、若き王は跳び起きた。

瞳孔の見開いた碧い瞳を再びゆっくりと閉じた。

瞼に浮かぶ先程までの悪夢。

少年だった頃の過去の記憶。

己に刻まれた呪われた者の証。

そのすべてを月明かりが残酷にも照らし出した様だった。

黒衣をはだけさせ、汗ばむ白い肌を露わにし、瞳を開いて頭を抱える。

慟哭する過去の自分を自嘲した。

「国を手に入れた……」

「やっと舞台上上がったんだ……」

声も出さずに笑い続けた。

頬を伝い落ちる涙が月明かりに反射して青白い光を添える。

笑い終えた若き王の瞳から冷えた悲しげな涙は消え去り、熱い憎しみの涙が流れた。





## 第八話

ティアールがアブニアの城主となつてから一ヶ月の時が流れた。すぐに民達に受け入れられた新しい王はすぐさまに城壁の強化を開始した。

壮観な城壁が出来上がってきた頃、アブニアでは大きな問題が起こり始めていた。

「ティアール様、鉄と果物が最近激しく高騰しております。」

「さらにはアブニアの特産品である小麦の値が急激に下落しております。」

「仕掛けてきたか……。」

鉄はゴダイで多く作られ、果物はクッサラムで多く作られている。明らかに隣国からの経済的圧力である。

市場には品物の値動きを示した相場表が貼られており、毎朝その表は張り替えられる。

【鉄	38	103】
【リスカ	12	51】
【ミール	9	14】
【小麦	57	18】

リスカは拳くらいの大きさの赤い果実で栄養価が高く、甘くて美味しい。

ミールは豆粒の様な小さな黄色い果実で保存がきき、酸味があり、癖になる味がする。

左が前日の値で右が今日の値である。

この表を見れば、値動きと今日の相場が一目でわかる。  
圧倒的なまでに一日で値が動いている。

毎日の様に相場は変動するが、これほどまで相場が動く事は歴史的に見ても前例がなかった。

今年は乾季が長かった為、この時期になれば小麦は高騰するはずであつたのに、大きく下落した。

落ち幅が尋常ではなく、物資を五群間での輸出入に頼っているエスカルナではあつてはならない事であり、小麦生産を生業としているアブニア領民には死活問題と言える値の動き方だ。

「リユナス。」

「鉄と、リス力を買い占めろ。」

「そして値動きが大きい四種の売り買いを領民に固く禁じるのだ。」

「しかし、ティオール様、鉄とリス力は異常なまでに高騰しており、買えば確実に損をしてしまいます。」

「明日以降、もう少し値が下がってから買えばよろしいのでは？」

「それにこれは明らかに隣国からの……」

遮る様に少し興奮気味な口調でティオールが怒声を浴びせる。

動揺しているのか、少し膝が左右に振れていた。

「今の内に買っておかねば、明日以降に値が下がる保障等どこにもないではないか。」

「果実はいいとしても、鉄だけは今の内に買っておかなければ、戦になった時に武器を作る事もできない。」

そうしてリユナスは命じられるまま、鉄とリス力を買い占めた。

当然翌日、市場に張り出された相場表は過去に類を見ない恐ろしい数字が並べられていた。

【鉄	103	572】
【リスカ	51	228】
【ミール	14	28】
【小麦	18	51】

ゴダイの街に再び集まった四人の王達は相場表と問者からの報告に酒を酌み交わし、大笑いした。

いつもは冷静なマトリアスもこの時ばかりは声を上げて笑う。

アクシズだけが、いつもの様に表情を崩さず、無言のままに酒をちびちびと飲んでいた。

「脆弱の馬鹿が、高騰しきつた鉄を焦って買い占めたらしいぞ。」

「国財はほぼ使い切つたようだ、今後どう出るか楽しみだな。」

しかし、次の日の相場表を見た四人の王は愕然とした。

【鉄	572	15】
【リスカ	228	8】
【ミール	28	20】
【小麦	51	108】

ティアールは値の上がりきつた鉄とリスカを前日に買い占めた分と国にあった物、さらに領民達が所持していた物のすべてを売り払つたのだ。

四人の王も上がった相場に便乗し、儲けようと欲をかき、少しくらいならと自国の鉄とリスカを市場に流した。

それによって鉄とリスカに異例の大暴落がおこつたのである。

さらには暴落を予期していたティアールは鉄とリスカを翌日、買い

戻すように手配していたので、相場表を見て焦って買い戻そうとした王達が動いた時には既に遅し。

完全に主導権はティアルが握った。

大量の金を入手したティアルは値の下がった鉄とリスカを大量に買い戻し、以前よりもさらに大量に保持する事となった。

鉄とリスカはまたも大高騰したが、すでにアブニアには無用の長物。そして、四人の王達をさらに悩ませる問題が起こった。

数日後には今度は小麦が徐々に高騰していったのだ。

【小麦 108 123 158 192】

アブニアは小麦の取引を完全に取りやめた。

故に流通する小麦の量は徐々に減っていき当然の様に高騰したのだ。さらには値動きの少なかったミールも高騰していった。

財政難に陥ったクツサラムが、大量のミールを安価で市場に放ち、底値になると見るや、アブニアに買い占められたのだった。

最早、財政を圧迫されたのはアブニアではなく、四人の王が治める四群となっていた。

【鉄 532 548】

【リスカ 181 201】

【ミール 98 108】

【小麦 192 235】

すべての物価が高騰してしまった今、物資と金を大量に持つアブニアが圧倒的に経済的優位を確保した。

怒りに打ち震えながら相場表を眺めていたチェシャウが手に持っていたグラスを地面に叩きつけた。

ユリアーゼは頭を抱えて頂垂れる。

マトリアスも眉間に皺をよせて、グラスの酒を一気に飲み干した。

アクシズだけが、この期に及んでも取り乱す様子なく冷静にただ酒をゆつくりと飲んでいた。

「親父殿……これは一体、どうゆう事だ！」

グラスを叩き割っただけでは気が治まらないのか、机の上にあるグラスや酒瓶をすべて床にぶちまけて怒りを露わにするチェシャウ。

「わしが奴を甘く見過ぎた。」

「戦力を消耗せず潰そうなどと思っておったが……」

「金は後に国力となる。」

「今ならまだ兵力は俺達の方が圧倒的に上だ。」

「まさか、この期に及んで戦に異論はねえだろうな？」

ユリアーゼだけはまだ怪訝な表情をしていたが、他に選択肢はなく頷いた。

アクシズは相も変わらず無関心な様子であつたが、「了解」と小声でつぶやいた。

「今に見ている、脆弱よ。」

「八つ裂きにしてくれる。」

陽が落ち、天に上った半分に欠けた妖艶な月に向かい呟いたチェシャウは遠吠えの様な雄叫びを上げた。

## 第八話（後書き）

お詫び。

表現力が足りない事と、くどい文章になる事を恐れて相場表を文章で表現せず、そのまま（絵の様に）載せてしまっています。ご不快になられた方、申し訳ありません。

## 第九話

「攻撃に鋭さを求めなくていい、当てる事を優先するんだ。」

アルが普段はあまり見せない真剣な表情で兵達に檄を飛ばす。

以前からいた元上級民四千とその後、志願してきた元下級民の兵が二千。

アルはすでに六千の兵を率いる將軍となっていた。

初陣の勝利から一カ月が経ち、今では傷もすっかり癒え、毎日練兵に励んでいる。

先の戦いで垣間見た、勇猛な戦いぶりに兵達の多くは彼に熱い信頼を寄せていた。

「どこでもいい、負傷させれば必ず相手の戦意は半減する。」

「殺す事よりも勝つ事が大事だ。」

「そして、生き残る事が。」

六千の兵が一斉に敬礼する様は壮観であった。

優越感に鼻を膨らますアルの後ろでエルノアは咳払いをした。

アルは慌ててエルノアの方を向き、引き締まった表情を無理矢理に作った。

「エ、エルノア副長、なにか？」

「そろそろ模擬戦を……」

実戦経験のないアブニアの兵達はここ数日は毎日模擬戦形式での練兵を行っていた。

軍を三千ずつに分け、赤軍の将をアルが務め、白軍の将をエルノア



が務めた。

戦況は防衛戦。

城に見立てた簡易的な砦を作り、それを交互に護る軍と攻める軍とに分けて行つた。

兵達は矢尻のない矢を番え、刃のない槍を持って挑んだ。

今日は受け手が赤軍で、攻め手が白軍だった。

白軍は三方に分かれて砦を攻めた、三百づつの兵で砦の左右を攻め、残りの二千四百の本体は矢の届かぬ位置で待機した。

赤軍はそれに対し、軍を二手に分け、左右の敵を迎撃した。

降り注ぐ矢に瞬く間に左右の軍を失った白軍だったが、本体が素早く砦を責め立てた。

慌てて応戦する赤軍だったが、白軍は赤軍が左右の軍を迎撃している間に四百の兵に背後に回らせており、二千の本体が攻めかかると同時に背後を襲わせた。

混乱の埒埒に落ちた赤軍の砦はあっさりと陥落したのだった。

「またエルノア副長に負けた……」

「アル將軍は敵に惑わされすぎます。」

「敵に動かされてはなりません、敵を己の意のままに動かす事が兵法です。」

模擬戦の結果はアル率いる赤軍の惨敗続きであつた。

攻め手に回れば中々にいい勝負をするものの、受け手になるとまったく勝つ事ができなかった。

「それにしても、將軍は先日我々との戦が初陣とは誠ですか？」

「ほ、本当ですよ。」

真面目な性格からか、エルノアは話す時に顔を近づける癖がある。その日は驚きも相まってか、いつも以上に顔が近い。

くつきりとした目鼻立ちに、美しく長い睫毛。

それでなくても視線を向けられれば、男の正気をなくさせるであろう美貌を持つ彼女が、吐息が掛かるほどに顔を近づける。

アルは顔を赤面して威厳を保とうと務めるが、物腰から動揺が見てとれる。

「驚きです。」

「あれだけの腕があれば、かなりの戦功を上げていらっしやるものかと……」

アルのだらしなく綻んでいた表情がきゅつと締まった。

「色々と ありまして。」と小さく呟く彼はどこか悲しげだった。

アルはミナソルタと言う、山間にある小さな村の出身であった。

ミナソルタに住む村人達はかつて栄華を極めた一族の末裔であったが、今では虐げられ、奴隷の様に扱われて、ひっそりと隠れる様にして暮らしていた。

物心ついた時には、すでにそんな境遇だったアルに栄華を極めた先祖達の事はよくわからなかった。

両親は幼いアルに口癖のように「力があれば幸せになれるのだ」と言い聞かせ、虐待に近い程の武術の訓練を強いた。

さらには生傷の絶えぬ身体を摩りながら、毎日毎日寝る間も惜しんで、兵法書を読み漁る幼少時代を過ごしてきたのだった。

アルは二十歳になる頃には帝国に士官し、兵士となったがミナソルタ出身であると言う事で疎外され、戦地に赴けど、後方に待機させられ、前線の兵士達の食事を用意させられたりするだけで、功を立

てる機会すら与えられなかった。

そして、疎外され続けたアルは四年の年月を雑用係として過ごし、終ぞ戦を経験する事のないまま、ティアールの元へと送られた。

「 将軍、将軍。」

「ごめんなさい。考え事を……。」

「将軍すっかりして下さいよ。」

「いつ戦になるかわからないのですよ?」

「わかつている、わかつているさ。」

六千の兵とエルノアがアルを一斉に見つめている。

戦経験の少ない自分を信じる彼等を、導けるのか不安になったが、そんな事を言ってはられない。

既に自分の為だけに戦ってきたこれまでとは違い、大勢の兵を従え、大勢の民を護る為に戦わなければならない。

細身の双肩が小刻みに揺れた。

皆に悟られない様に足の指先にこっそりと力を入れて、震えを噛み殺す。

練兵を終えた兵士達は帰り支度をする前に近くの湖で行水をしていた。

朝から陽が落ちるまでの過酷な稽古で火照った身体に冷たい水が心地よく染みわたる。

「今日の練兵はいつも以上にきつかったな。」

「赤軍は今日も負け戦だったから余計に疲れただろう?」

がたいのいい男が隣の痩せた男をつついた。

男につつかれて、湖の中に頭から落ちた痩せた男は、犬の様に頭を左右に振りびしょ濡れの髪を払った。

「將軍を馬鹿にしているのか？」

「將軍は……」

痩せた男の言葉にかぶせる様にして、周囲の男達が声を揃えた。

「「將軍は、稀代の英雄、万夫不当の猛将なんだからな！」」

痩せた男の口癖だった。

周りの男達が彼を嘲笑った。

「アル將軍が勇敢な方だつてのは全員が知っているし、認めているさ、けど軍を率いるのに慣れていないのも事実だ。」

「戦になれば、エルノア副長についていった方が賢明だぜ。」

痩せた男は濡れた身体にそのまま服を羽織って、憤慨した様子でその場を去った。

彼は名をルビ・ルキヤルーナと言った。

ルビの階級は百人隊長で赤軍に所属していた。

アブニア兵の中でも、最もアルに心酔している男であった。

「なんだよ、皆そろって……」

「先の戦いでアル將軍をしつかり見ていないからわからないんだ。」

彼は一か月前の戦でアルを間近で見っていた。

四千の大軍に恐れる素振りも見せず立ち向かい、一時はたったの一人で大群を恐れさせ、慌てふためかせた敵軍の將軍と名乗る男。

彼の眼前で蝶の様に舞い上がり、それと共に跳ね上がる仲間の生首と鮮血。

死神の鎌の様に命を刈り取るその双剣は、射し込む木漏れ日を乱反射させ、見る者の魂をその光源へと引きずり込んでゆくかの様だった。

あの日の將軍を思い返していると、先程の仲間達の嘲笑が聞こえてきた気がした。

再び湧きあがる鬱憤に、彼は道端に転がる小石を力いっぱい蹴り飛ばした。

## 第十話

その日はいつもの朝よりも幾分か静寂の割合が多い。  
そんな朝だった。

普段であれば、太陽が最も高く上がる頃まで寝ている怠け者のティ  
アールがこの日だけは陽が昇ると同時に目を覚ます。

まだ新調されたばかりの、真新しい自室の窓から外を見る。  
そこから見る景色は絶景で、昇り来る朝日が煌びやかに街を包んで  
いく。

遙か北の地平線にゆらりと舞い上がる土煙を目の端に捉える。

ティアールは青白い頬を釣り上げて、冷笑を浮かべた。

敵襲を知らせる鐘の音が鳴り響く。

甲高い鐘の音に眉に薄らと皺を寄せ、冷笑を浮かべたまま、ティ  
アールは黒衣に身を包む。

リユナスが纏めきれしていない銀の髪を、左手で抑えながらがノック  
もせずに、ティアールの部屋に飛び込んできた。

「ティアール様、矮小の王、チェシャウが五千の兵を引き連れ、攻  
めて参りました。」

「さあ 幕が上がるぞ、リユナス。」

「この鐘の音が、混沌への序曲だ。」

チェシャウは自信満々と言った様子で率いた軍の中央にいた。

ティアールはその姿を一瞥し小さく舌打ちをして、エルノアを呼び  
寄せた。

「エルノア、矢を放て。」

「しかし、この距離では当たりません。」

「いいから、今すぐ放て。」

千の弓兵を城壁に並べ、矢を番えさせた。  
エルノアのか細い腕が、高らかに天を差す。

「つてえ！」

ハープの高音を弾いた様な辺りを劈く号令と共に振り下ろされる腕に合わせ、番えられた千の矢が、チェシャウの軍勢目がけて放たれた。

しかし、エルノアの進言通り、矢は届かずにチェシャウの軍勢よりも遙か手前に空しく落ちていった。

「矢の撃ち方も知らねえとは……」

「マカスを降したと聞いて、少しはましなのかと、期待してたんだがな。」

ゆつくりと軍を進めながら、チェシャウが城壁に佇むティアールを蔑んだ。

「チェシャウよ、いいのか？ 備えなくて。」

「我が千の矢に、その身を貫かれるぞ？」

ティアールは冷笑を浮かべながら、まだ少し射程距離より遠くで進軍を止めた敵軍を見下した。

「貴様達の弓の射程はわかった。」

「ここなら絶対に届くわけはねえ。」

「エルノア、十三秒後に一斉射撃だ。」

「さつさと構えさせる。」

「しかし、我が君、この距離では」

「さつさとしろ！」

ティアールの激昂に、急ぎ立てられ、言われるまま慌てて兵達に矢を番えさせた。

高らかに笑い罵倒するチェシャウを余所に、小さな声でエルノアが数を数える。

「4、3、つてえ！」

再び放たれた矢は先程とほぼ同じ軌道でチェシャウ軍へと向かったが、やはりその手前で矢の勢いは激しく失速した。

またも届かない思われた矢が突如として、その勢いを盛り返し、軌道が上擦った。

そして大きく飛距離を伸ばした矢は、チェシャウ軍へと容赦なく降り注いだ。

直前まで笑っていたチェシャウ軍は突如自軍に降り注ぐ、激しい矢の雨に取り乱し、多くの兵が刺し貫かれた。

「アブニアの上空には激しい突風が吹く事がある。」

「戦での初撃は不可解であればあるほどに士気を下げ、動揺を誘う。」

踏ん返り返って大笑いするティアールが、何故自分達の放った矢が



敵軍に届いたのか理解できないといった表情の兵達にからくりを明かす。

矢が掠めた肩を抑えながら恨めしそうにチェシャウがティアールを仰ぎ睨む。

「どこまで、俺を馬鹿にすれば気が済む……」

「全軍突撃！」

「城門を破壊し、奴を引きずりだして八つ裂きにしろ！」

怒り心頭のチェシャウは剣を頭の上で振り回し、全軍を突撃させた。エルノアは迫りくる敵軍に続けざまに矢を放ったが、怒り狂った敵兵は足を止める事なく、犠牲を払いながらも城門へと駆けてきた。敵の先陣が激しく城門にぶつかり、ティアールが腰かける椅子が揺れに引きずられる様に擦れる。

「全軍、城門にいる敵兵に投石を」

「エルノア、待て。」

「投石など体力の無駄だ。」

「煮えた油を」

「かしこまりました！」

今度はすぐに合点がいった様子で言葉を被せ返して、エルノアがきびきびと兵達に指示を送る。

ばら撒かれた油が飛散して、敵兵が断末魔の叫び声を上げる。

その場で鎧を脱ぎ棄てるが、すでに肌にべつとりと付いた油が、肌を焼く。

素っ裸で悲鳴を上げて転げまわる敵兵達の光景は、まさに地獄絵図そのものだった。

「アルに指示を出せ。」

「我が敵を穿て、と。」

エルノアが城壁の階段を滑るように降りて、アルの元へ駆けていく。そしてティアールの伝言を伝え、すべてを悟った様にアルが兵達に指示を出し始めた。

エルノアがティアールの元に戻った時には、アルが敵軍に襲い掛かる寸前であつた。

アルは千の騎兵を引き連れて、一直線に敵軍へと駆けていく。両軍がぶつかり合った瞬間に、敵兵は木っ端の如く吹き飛んだ。アルは自分の身長よりも長い槍を振り回し、近づく敵兵を巻き上げた。

まるでアルの周りにだけ小さな竜巻が発生している様で、舞い上げられた兵達は切り裂かれ、血の雨を降らせた。

騎馬の速度を緩めずに敵兵を粉碎し、陵辱しながら、チェシャウの元へと突き進む。

敵兵達はすでに戦意なく、恐怖に震えながらただ殺される者や、怯えて逃げ出す者で、チェシャウの軍は完全に瓦解していた。

迫りくる敵軍の猛将にチェシャウは戦慄し、青ざめて、悲鳴に近い声で退却を全軍に指示した。

すぐに退却し始めた敵軍をアルは少し追撃して、追うのを止めた。

「我が軍中に、アルを兵法に疎く、勇猛だけが取り柄の将と呼ぶ者もいるそうだな。」

徐に呟くティアールにエルノアは眉を吊り上げた。

もちろん彼女も、そういった声が軍中で上がっている事を把握していた。

「そう言う者もいます、しかし」

「それでいいのだ。」

いつもの通りに自分の言葉を遮る主君。

しかし、発せられた言葉はエルノアの頭にないものだった。擁護しようと開いたその口は、驚きに開けたままになった。

「私は知勇に優れた、深謀遠慮な将がほしいわけではない。」

「ただ、我が命に従い、敵軍を切り裂き、敵将を討つ、そんな飛矢が一本あればいい。」

「あれは思慮に欠け、策謀に疎い。」

「されど、電光石火で飛来しては、己が主君の敵を穿つ。」

「そうゆう将だよ。」

そして、アルを馬鹿にするように嘲笑しながら「だからお前を副官につけた。お守りは大変だが、大任だ。」と満足げに言い放った。

「にしても、あの馬鹿は敵を逃がしておいて、ヘラヘラしておつて。」

下がっていた目元を無理矢理に釣り上げて、城壁から凱旋するアルを見下ろし、睨みつけながらばやいた。

城に残っていた兵達は勝利を決めた將軍に大きな歓声を送り、大手を振りながら笑顔でそれに応えるアル。

エルノアはそんな二人が少し可笑しくて、周りに気づかれない様に小さく笑った。

「まったく、我が王と、我が將軍ときたら……」

## 第十一話

「ちくしょう！」

机をひっくり返し、髪を振り乱してチエシャウは激昂した。

ものの見事に迎撃された五千の兵は既にその数は十分の一にも満たなかった。

チエシャウが戻ったのは、四人の王が共同で張った陣営である。

アブニアから数里先にあるその陣営は峡谷の間にあり、奇襲の仕掛け難い場所を意図的に選んでいる様だった。

警戒、と言うよりもある意味自信の表れだ。

奇襲以外で自分達が負けるはずがないと。

しかし、その通りだった。

その陣営に駐屯する兵は、今だアブニアの兵力のおよそ倍近かった。

「貴様ら、まさか脆弱に臆したんじゃないだろうな？」

「どういう意味だ？」

「何故俺が奴を攻めているのに、貴様らは出兵しない？」

「それは貴殿が勝手に先走ったのだろっ。」

「黙れ！ お陰で我が軍はほぼ壊滅だ。」

「再び軍備を整えるまで貴様らが奴の相手をしろ！」

喚き散らすだけ喚き散らしたチエシャウは言葉を吐き捨て、配下達の血と逃げる時についた砂埃で汚れた外套を翻し、その場から去っていった。

チエシャウが後にした軍営で、しばし沈黙していたユリアーゼが深いため息の後に怒声を漏らす。

「奴は何様だ！」

「私達を奴の配下と勘違いしているのではない？」

「そう言うな。」

「陽が昇る頃に攻め、陽が降りきるまでも五千の軍が持たなかったのだから、チエシャウが激昂するのも致し方あるまい。」

「しかし　脆弱の王がこれ程までの知略家だったとは、な。」

「……我ら三方から攻めるが良策。」

静かにアクシズが呟くと、マトリアスが賛成し、ユリアーゼも渋々同意した。

既に陽は沈んでいたが、篝火を灯し、兵達に出陣の準備を整えさせる。

指揮権を取るのは老練の王、マトリアス。

彼に油断はなかった。

体勢を立て直す暇を与えず、一気呵成に攻め続ける事が奇策を弄する弱国には最適の策だと知っているのだ。

翌日、アブニアを大量の兵が包囲した。

ユリアーゼ、アクシズ、マトリアス連合軍のその数は万を数えた。三千のユリアーゼ軍が西門を、同じく三千のアクシズ軍が東門を、そして昨日チエシャウが敗れた北門よりマトリアスは四千の兵を引き連れて攻めて来た。

西門の指揮をエルノアが執り、東門の指揮をアルが執った。

ティアルは昨日と同じ場所に踏ん反り返り、マトリアスの迫る北門の指揮を執った。

アブニアの各門は決死の応戦をする。

矢を放ち、石を落とし、油を撒く。

しかし、三人の王の連合軍は怯むことなく、仲間の屍を踏み締めながらも、門を攻め続けた。

軋む門と、怒声を浴びせて攻め寄る敵兵。

戦経験の少ないアブニアの兵達は恐怖に半狂乱で迎え撃つ。

日が沈む頃には連合軍は引き上げていった。

後には大量の骸の山。

それでも悠然と引き返していく連合軍に微かに抱く畏怖の念。

「ティアール様、西門の死傷者は過少です。」

「東門も損害は軽微です。」

「……そうか。」

「しかし」

エルノアが何やら口籠り、アルはそれを察した様に俯く。

ティアールは追求する事はなく、只々城下に転がる骸を見つめていた。

「兵達の士気が心配です。」

「敵軍の死傷者は恐らく数千、しかしあの去り様はまるで」

「勝ち戦、と言わんばかりであつたか？」

「はい。何やら不気味に感じました。」

「敵を多く屠り、戦況だけ見れば昨日から引き続いての我らの圧勝。」

「けれど兵達は戦いの疲れと恐怖で意気消沈と言った様相です。」  
「明日も連合軍は攻めて来るでしょうか？」

「攻めて来ない様なら、奴等は揃いも揃って乱心者だ。」  
「十中八九、いや、確実に明日も来る、明後日もその次も、この城を攻め落とすまでな。」

「城攻めとはそういうものだ。」  
「少なくとも、マトリアスは我が軍が籠城した瞬間から短期決戦なぞ、頭がない。」

そして翌日、ティアルの言うとおり、兵を増強した連合軍が城を攻めてきた。

その日は各門を五千ずつの兵で襲い、少数の兵が後方から銅鑼を鳴らして、罵倒したり、挑発する言葉をアブニア兵へと投げかけた。日が落ちる頃になっても連合軍は退く事はせず、アブニアを取り囲むようにして陣を張り、夜営を始めた。

「臆病者のアブニア兵。」

「籠って震えて、小便垂らし。」

「女と国を差し出せば、臆病者には用はない。」

「脆弱王は弱虫で、將軍アルは洩垂れ小僧、副長エルノア、弱虫王に身体を使って取り入って、最後にや国を売る。」

などと夜通し口々にそんな歌を歌い、酒を酌み交わす。

アブニアの兵達は怒りに夜も眠れず、布団を噛み締めた。

「エルノアよ。」

「この歌が大陸に広まれば、お前は時代に名を残す悪女になれるぞ。」

「美貌も三割増しくらいで語られるのではないか？」



「私とアルにも、もう少し捻りを加えて欲しいものだな。」

ティアールは酒を煽りながら呑気に笑った。

アルもこういう時は意外に度量が大きく、少量の酒で酔っ払って、すでに酈を掻いている。

エルノアも平静を装っていたが、頬は痙攣する様に怒りに震えていた。

「エルノア、案ずるな。」

「奴等も焦っている証拠だ。」

「城を落とせないかもしれない、と思うから野戦で戦わせようと我等を挑発する。」

「将が苛立っては、兵達にもその苛立ちが伝染してしまう。」

「籠城とは心穏やかに、只管に迫り来る敵の命を絶ち続ければいい。」

「

先ほどまで咳き込む程に馬鹿笑いしていた男とは思えない説得力のある言。

エルノアは何だか苛立っていた自分が馬鹿馬鹿しくなってしまった。その日はエルノアも珍しく酔う程に酒を飲み、やがては微睡んでいた。

## 第十二話

連合軍はアブニアを三日三晩攻め続けた。

しかし、籠城戦をすでに予期していたティオールが強化した城壁や、城門は高く頑丈であつた。

「このままでは兵の損害が広がるばかりだ。」

「敵は籠城の訓練もよくしていて、思つた以上に手強い。」

さすがの三人の王達にも焦りが見え始めていた。増兵を繰り返しつつ攻め続けた連合軍であつたが、その死傷者はすでに万にも昇りそうだった。

「明日で決着をつける。」

「すべての兵を投入し、一気に攻めかかるぞ。」

アブニアも連日の防衛線で死傷者は増え、城壁には亀裂が生まれ、城門は軋んでいる。

昼夜交代で修理をしても、攻め続けられてはままならない。

条件は同じに見えても、その兵力差は歴然だった。

犠牲が出ているとはいえ、増兵を繰り返す連合軍の兵力は今だ一万五千。

対するアブニアは動けぬ負傷者を除けば、三千にも満たない兵力しか残つてはいなかった。

「そろそろ、耐える事も難しくなりそうです。」

「兵達は負傷し、疲弊しきつています。」

「それは奴らも同じだ。」

「俺の計算が正しければ、奴等は近々撤退する。」  
「糧食がそろそろ底を尽く筈だからな。」

ティアールもさすがに憔悴しきっていたが、エルノアの不安を取り除こうと答える。

確かに連合軍の持つてきている糧食はすでに残り少なかった。ティアールは初めから勝てると思ってはいなかった。

連合軍の糧食が尽きるその時までの辛抱。

そう思っただけで耐えてきたのだ。

小麦の取引を取りやめ、相手国を食糧難に陥らせる事。

持久戦となる事を攻め入る前から予期していた事。

初めからすべて、ティアールの策略の内だった。

「しかし、耐えられるのか……。」

脳裏に一抹の不安が過ぎる。

見渡せば、負傷し悲痛に喘ぐ兵達。

死んだ友を想いすすり泣く声。

いつもは自信に満ち溢れるティアールも斯様な光景を見れば不安に駆られるのも当然だった。

城外の連合軍が隊列を組み始めた。

それと同時に激を飛ばし、兵達を城壁の守りにつかせる。

けれど、兵達の足取りは重い。

残っている三千の兵も、少なからず負傷している。

傷ついた足を引き摺る者。

すでに握力の込められない腕に弓を巻きつける者。

三千の兵、すべてが限界を超えていた。

城下に広がる連合軍はその数、一万五千。

これまでで一番の大軍だった。  
しかし、ティアルはその大軍を見て、胸を撫で下ろした。

「敵が全軍を投入してきた。」

「おそらく糧食が尽きたのだろう。」

「今日を耐えれば、我らの勝利だ！」

檄を飛ばすが兵達は応えない。

最も疲弊している今、敵が全勢力で今から襲い掛かってくると言うのだから、無理はない。

大の男達が瞳に涙を浮かべ、恐怖に膝を震わせる。

ティアルは唇を噛み締めた。

『だが、耐える自信はある。』

そう思ったその時だった。

連合軍の大軍は三方に分かれる気配はなく、北門に向かって進軍してくる。

そして、後方からは見慣れない、おかしい形をした、木でできた車が前線へと押し出されてくる。

ティアルは青褪めて、城壁に齧り付き、その車を凝視した。

「ここで撞車だと……」

ティアルの言う、撞車を先頭にし、大軍が一步、また一步と城壁へと迫り来る。

ティアルはその場に崩れ落ちた。

エルノアは驚き、すぐに傍に駆け寄った。

「ティアル様、いかがしました？」

「まずいぞ。」

「あれは城門を破る兵器だ。」

「今の兵力では、撞車の攻撃を防げない。」

撞車とは、尖らせた丸太を中心に下げ、振り子のようにして、城門に尖った丸太を打ち付ける為の物だった。

必死に撞車へと火矢を射掛けるも、敵兵が固く撞車を守り、傷つけることはできない。

連合軍も糧食が尽きた今、撞車を失ってしまったては勝てないことをよく分かっている。

ティアルはそれまで見せた事がないほど、狼狽えていた。  
すると北門の内側にアルが馬に跨り現れた。

「門を開けよ。」

「僕が敵の攻城兵器を討つ。」

その後に続くのはアルの腹心である、百人隊長のルビの百人隊だった。

当然、連戦で傷ついたその身体は他の者と変わらず痛々しかった。

「アル！ 馬鹿を言うな！」

「敵は一万を超える大軍。」

「百騎足らずでは、死に行く様なものだ！」

声を荒げて制止するティアルにアルは目を向けなかった。

けれど、ティアルにはその後ろ姿が小さく微笑んだ様に見えた。

「いいから、城門を開ける！」

アルの怒声に、門兵が慌てて城門を開く。

馬の腹を蹴り、アルと百騎の騎兵が敵の大群へと勢いよく駆け出した。

身を屈めて、馬にしがみ付く。

連合軍は迎え撃つ姿勢を取ったが、あまりのアル達の勢いに尻込みをしている。

百の騎兵が撞車にぶつかる。

馬から放り出されて舞い上がる兵達。

突撃により、吹き飛ばされる連合軍の兵と粉微塵に砕け散る撞車。

その光景は城門より出でた、一本の巨大な槍が敵の先陣を貫く様だった。

アルと騎兵達は馬に大量の油壺をくくりつけていた。

激突の衝撃に壺が割れ、敵の先陣に油が降りかかる。

ルビは肩を痛めたのだろうか、痛みに顔を歪ませながら、懷から火打石を取り出した。

「アブニア万歳だ　馬鹿野郎。」

石を打ち、傍を流れる油に火をつける。

油が飛散した敵の先陣が一拳に燃え上がる。

突撃したルビの百人隊と共に。

「私の考えが甘かったせいだ……」

城壁にしがみ付いていたティアールが力なくずり落ちる。

エルノアも口を抑えて、膝をついた。

燃える連合軍は阿鼻叫喚と化した。

それはアブニアの勝利を物語るものだったが、喜びの歓声を上げる者は誰もいなかった。



### 第十三話

一万を超える大軍と言えど、一度浮き足立った兵達は脆い。ティアールは悲しみを振り払う様に、追撃の命令を発する。

アブニアの兵達は今までの鬱憤と失われた命を猛り狂う怒りに変え、城を出た。

錯乱する兵達を背中から斬り付ける。

飛び散る鮮血と燃える大地。

すべてが紅く包み込まれる様だった。

細剣を振り回してエルノアが先陣を切って敵を追う。

左右に振り回される細剣は紅く輝きながら連合軍の死体の山を創り上げた。

今の今で激戦を繰り広げていたとは思えない、塵一つついていない美しい鎧を羽織った長髪の男がいた。

エルノアは男を目の端に捉え、馬首を男へ向けた。

「美麗の王、ユリアーゼ！ 覚悟。」

ユリアーゼは短い悲鳴を上げた。

エルノアの細剣はユリアーゼの心臓を一刺しにした。

断末魔の叫びを上げて小さくユリアーゼが呟く。

「だから、私は、戦など……」

細剣を抜きさり、汚れた細剣を一振りしてその血を払う。

馬上から息絶え、崩れ落ちたユリアーゼを見下げたエルノアは悲痛の表情を浮かべた。

こうして、連合軍のアブニア攻めはアブニアの逆転勝利で幕を閉じ



た。

逃げ惑う連合軍は悉く、エルノアの追撃隊に追い詰められて命を落とした。

しかし、マトリアスとアクシズの両名は命からがら自国へと逃げ延びてしまったのだった。

「ご報告致します。」

「アブニアの境付近まで敵を追撃し、美麗の王、ユリアーゼを討ち取りました。」

「しかし、残念ながらマトリアスとアクシズは取り逃しました。」

「そう……か。」

「大儀であつた。」

「兵達を休ませよ。」

明らかにいつものティールとは違った。

肩を落とし、瞳は虚ろで漆黒の黒髪は萎びた様に彼の顔に張り付いている。

「っ。」

言葉を発しようとして、エルノアは飲み込んだ。

今は何も声を掛けない方がいいと思った。

あまりの悲しみに遭遇した者は、言葉を掛ける事が重荷になる事もある。

彼女はよく知っている。

突き放されたり、放って置かれた方が幾分も心は軽くなる。

「畏まりました。」

二歩後ずさりして、踵を返したエルノアの後ろすがたを虚ろな瞳をそのままに見送ったティールはグラスに酒を注いだ。

その酒はアルが「戦に勝利した暁には」と連合軍が攻めてきた時に持ってきていた物だった。

酒の弱いアルだったが、ティールはそんなアルをよく飲み相手にしていた。

一口含むが味がわからない。

銘の入ったラベルに目を遣ると、かなり高価な酒である事はわかった。

「ティール様、被害状況を」

傍に寄ったリユナスを掌を向けて制止した。

「リユナス。」

「アル・サージェンと言う男をお前はどう見ていた？」

「……………」

「初めてあの男を見て、話をして、こいつは少し私に似ていると思ったよ。」

「弱く、けれどその瞳の奥には光があった。」

「……………」

「自分で用意した酒を、主に注ぐ事もせず消えるとは、とんだ不忠の輩だ。」

「不忠者め……………」

グラスの酒を飲み干し、その場に叩き付ける。

砕け散った破片は夕日にきらきらと反射して、血飛沫の様に、城下に今だ残されたままの敵味方の遺体と重なった。

一夜明け、城門の前に転がる遺体を片付ける作業が始まった。戦開始から放つてあったモノはすでに異臭を放ち始めていた。敵兵と味方の兵を識別しながら作業を進める。

後片付けを終えた兵士が敵と味方の死傷者数をエルノアに報告をした。

「敵兵の死体の数は一万と百五十二。」

「味方の兵は、九十八名です。」

「そうか……。」

敵とはいえ、一万を超える兵を殺めたのか、とエルノアは塞ぎ込み押し黙ったがすぐに何かを思いついたようにハッとして顔を上げた。やや興奮気味に報告しに来た兵の胸倉を掴んで引き寄せる。

「待て、味方は九十八名と言ったな？」

「百名ではないのか？ 数え間違えたのではないのか？」

「い、いいえ、味方の兵は何度も数えたので間違いないです。」

「その中にアル將軍の遺体は？」

「私達もよく探したのですが、ありませんでした。」

「あとは百人隊長のルビ・ルキアルーナの遺体もありません。」

「そんな馬鹿な……。」

慌てて遺体を確認するが、九十八名の中に確かにアルと思われる遺体はなかった。

エルノアは敵兵の遺体も一つ一つ確認する。

投石により、顔を潰された遺体や、火で相当に焼かれている遺体があったが、どれも連合軍の鎧を纏っていたのでアブニアの兵ではないとわかる。

さらには戦場となっていた城下に行くも、そこにすでに痛い片付けられ、残されているのは木片や、鉄片の様な残骸だけで、死体はなかった。

兵に指示を出し、戦の直後で疲れた身体を懸命に動かして、総出でアルの遺体を搜索したが、太陽が沈む頃になっても遺体は見つからなかった。

「將軍。まさか生きておられるのですか？」

「けれど、それならどこに……？」

天に問いかけるように呟いたエルノアの言葉は、陽が沈みかけた黄昏に吸い込まれていった。

「君がチェシャウを退け、撞車に突撃したアブニアの將軍か？」

白髪の男が囁れ声で辿々しく問いかけた。

白髪だが、見目は若く、三十路は行かぬくらいであろうか。

問われた栗色の髪をした男が後ろ手に縛られた両腕を邪魔くさそうな様子で動かしながら、白髪の男を見上げ、睨み付けた。  
亜麻色の眼光は幼げな見目とは違い、刺す様に鋭かった。

「僕の名前はアル・サージェン。」

「アブニアの將軍だ。」

「私は、冷徹な王、アクシズ。」

「アル・サージェンよ、私の配下となれ。」

後ろ手に縛られて突つ伏す格好のアルは嘲笑を浮かべて、横に転がる様に仰向けになった。

アクシズが怪訝そうにその姿を見下ろす。

「折角のお誘いですが、忠臣は二君に仕えず。」

「お諦め下さい。」

アクシズは答えはわかっていたと言わんばかりに鼻を鳴らしてその場を去っていった。

余裕を浮かべていたアルの顔が激痛に歪んだ。

騎馬で突撃した時に痛めたらしく、身体中が軋む様に痛い。

酷く火傷も負っているらしく、所々がひりひりと熱を帯びている。憂鬱になる様な暗がりの牢に閉じ込められていたが、石床の冷たさが火傷に帯びた熱を和らげてくれるのだけが唯一の救いだった。

「さて、どうしたものか。」

「將軍？ その声は將軍ですか？」

隣の声から聞こえてくるその声は、間違いなくルビのものだった。

孤独ではない事に気づき、安心に一瞬気が緩む。

しかし、再び気を引き締めたアルは注意深く辺りを見渡し、自由を奪う手錠をよくよく観察した。

「これなら、なんとか脱出できそうだ。」

「本当ですか？ 折角生き残ったのに、すぐに殺されちゃうかと思

いましたよ。」

手錠は時間を掛ければ、壊す事の出来そうなそう頑丈な作りではなく、牢の鉄格子も人並み外れアルの膂力があれば、押し折る事は出来ずとも、歪めて人が通る幅を作る事は出来そうだった。

その事をルビに説明していると誰かが石床を踏み鳴らして近づいてきた。

アルとルビは慌てて牢の奥へと転がり、口を噤んだ。

「アル將軍、出てもらおうか。」

アクシズは大柄な衛兵を四人連れて再び現れた。

牢から出されたアルは手錠に重りを付けられ、さらには足枷とそこにも重りを付けられた。

手錠の鎖を掴まれ、引きずられる様に連れられて行くアルを牢の中から心配そうに見つめるルビに、アルは『心配するな。』と目配せした。

階段を上がって、薄汚れた地下牢から、華やかな城内へ。

出でてすぐ目に入った豪華なシャンデリアの輝きが視界を幻惑する。アルにとっては牢から出された事は好都合だった。

脱獄する際にどの様になっているかが偵察できるからだ。

辺りを注意深く見渡す。

アクシズの城はティアールのそれとは違い、高そうな壺や、華やかな装飾を施された豪華絢爛な作りとなっていた。

『そもそも王宮なんてものは、こんなものなのかもしれない』と、こんな状況にも拘らず、小さく笑みを浮かべた。

連れて行かれたのは、大きなテーブルを中央に置いた会食場で、テーブルの上には大量の豪勢な食事が並べられていた。

衛兵に無理矢理、卓に付かされたアルの正面にアクシズが掛けた。

「すまないね、將軍。」

「鎖を解いてあげたいのは山々なのだが、貴殿ほどの猛将を止められる兵は我が臣下にはいなくてね。」

「そのまま、食事を摂ってくれたまえ。」

「毒でも入っているのでは？」

と再び嫌味を言って嘲笑を浮かべるも、アクシズは「その状態の君に毒を盛る必要があるのかな？」と仕返しのように嫌味を吐いて、卑しく口角を上げた。

静寂の中、食事を摂る二人。

鎖に繋がれる男が豪華な食卓で食事を摂っている様は、とても異様な光景だった。

「君は何故、あの脆弱の王に忠誠を尽くす？」

「君は彼の事を何も知らないだろう？」

「彼が何故、最下位の王位継承者なのか、脆弱と言う、憐れ極まりない称号を受けているのかも。」

視線も向けずに食事を摂りながら、淡々と語り出すアクシズ。

確かにアルはティアルの事を何も知らなかった。

しかし、その人柄は己が忠義を尽くすに足る人物だと思えたから仕えているのだ。

「彼はね、別に末子と言うわけではない。」

「彼より若い王は大勢いる。」

「そんな私も、彼より一つ若い二十四だ。」

「おかしいとは思わないのか？ アル・サージェン。」

アルの眉間に皺が寄る。

目線を落としていたアクシズが、語尾を強めてアルは睨みつけた。アルは只管に沈黙を守り、アクシズの言葉を聞いた。聞いたからと言って、ティールを裏切る腹積もりは毛頭ないが、好奇心から知りたいと思ったのは確かだった。

「……彼は呪われし子なんだよ。」

再び視線を食事へと落とし、囁く様に言った言葉にアルは余計に眉頭を眉間に寄せる。

訝しげな表情をするアルを一瞥して、アクシズは皿の肉を口に運びながら続けた。

相変わらず、その語り口調は淡々としていて、感情は一切含まれていなかった。

第二章 アブニア包囲網 完



### 第十三話（後書き）

第二章これにて完結。

稚拙な駄文にこれまでお付き合いしてくれた方有難う御座います。  
まだまだ「脆弱の王」は前半戦ですが、未永いお付き合いを宜しく  
お願いします。

プロットを再構成して、第三章を公開したいと思いますので、しば  
し見限らずにお待ち下さい。

## 第十四話

「皇帝陛下、一大事にございます。」

「第867皇后、ティノワール様が無事ご出産されました。」

「しかし……」

天を突くかの如く、天井の高い部屋。

地平線が見えるのではないかと、思い違いをしてしまうほどに広い部屋。

室内だと言うのに、その部屋の所々では泉が沸き、煌びやかに装飾された壁や、彫像が光沢を放ち、水面に移る光が部屋中を明るく包む。

その部屋の最も高い場所に、豪華絢爛な玉座の上に、威風堂々たる皇帝ゼノアムが目を瞑り、座していた。

「そのお生まれになった、ご子息は凶兆の証である、碧い瞳をしておりました。」

「さらには、金髪の皇帝と、赤茶色の髪で有らせられるティノワール様のお子でありながら、その髪は禍々しき漆黒。」

「恐れながら、すぐに命を絶たねば、帝国の禍となります。」

静かに瞑っていた目を見開き、大地を揺るがす様な低音の笑い声を上げるゼノアムに、陳列する家臣達は目を瞬かせた。

しばし、笑い続けたゼノアムが、家臣達に視線を落とす。

その威光を恐れ、家臣達は後ずさりし、目を伏せて言葉を待った。

「800を超える子の中に、呪われた子が一人いた方が面白いではないか。」

「この私を殺すのは、寿命か、反逆者か、それとも呪いか……。」

再び、先程よりも大きな声で笑うゼノアム。

楽しげなその表情は、どこか恐ろしく、家臣達は震えながらに目を伏せていた。

それから十年の時が流れ、その名をティアールと名付けられ、呪われた子の烙印を捺された少年は十歳を迎えていた。

「ティアール様、今日も学校へは行かれないのですか？」

心配そうに眉間に皺を寄せる銀髪の少女が、美しく整えられた庭先にしゃがみ込むティアールの傍に近づき声をかけた。

「いかぬ。」

「学校なんて、行ってもつまらぬ。」

ティアールは不貞腐れた様子で口を尖らせる。

漆黒の髪と碧い瞳が、より一層にティアールの悲しげな表情を引き立たせていた。

ティアールは学校へ行くといつも周囲の人間にからかわれていた。

呪いの子と呼ばれ、何をしたわけでもないのに石をぶつけられたり、時には上級生に突然、殴られたりもした。

学校は皇族や、貴族ばかりが通う場所だった。

近い身分の者や、血の繋がりさえある者達に侮蔑される事は、幼いティアールにはあまりに辛かった。

「私は皇帝の子だぞ。」

「なのに、何故こんなにも迫害されなければならん……。」

悲しそうな瞳の奥に押し止め、堪えていた物が目頭を熱くさせ、一粒頬を伝い落ちた。

気丈にもそれを見せるのを嫌ったのか、ティアールは前で組んでいた腕の影に瞳を隠した。

銀髪の少女も顔を背けるように俯いた。

何もできない自分の無力さを呪うかの様に、俯いた少女もまた悲痛な表情をする。

それを見ていた若草色のドレスに身を包んだ美しい女性が二人の肩を後ろから抱いた。

「ティアール。」

「貴方は強くて優しい子です。」

「どんなに蔑まれても、逃げてはいけません。」

「多くの物に疎まれようと、貴方は一人ではありません。」

「この母や、リユナスがいるでしょう？」

ゆつくりと母を見上げるティアールは健気にも涙を堪える様に眉を吊り上げ、眉間に深い皺を寄せている。

頬は薄っすらと悲しみに濡れ、蒼い瞳が陽の光に当たって瞬いていた。

そんなの涙に気づかない振りをして、温かい笑顔を傾ける母にティアールはぎこちなく、引き攣った笑顔を返して言った。

「ズ、ズル休み、し損ねちゃったか。」

銀髪の少女リユナスが用意してくれた、勉強道具の詰まった鞆を慌てて肩にかけて走り去って行くティアールの後ろ姿を二人は見送った。

元気に駆けて行く少年の後ろ姿は、まだどこか寂しげで、リユナス

は堪えきれず、口を覆って涙を流した。

母は自分のドレスの裾を、誰にも気づかれない程度に握り締め、小声で「ごめんなさい。」と呟き見送った。

瞳と頬の湿りを吹き飛ばすかの様に、学校へと走る。

『あの角を曲がれば学校が見えてくる』

そう思うと脚は憂鬱に重くなったが、母を失望させまいと前に進もうとしたがらない脚を力一杯踏み出した。

すると突然目の前が暗くなり、視界が戻った時に目に映ったのは廣大に広がる青。

一瞬何が起こったかわからず、そのまま空を見上げていたティアールの脇腹に衝撃と激痛が走る。

堪らず脇を抱えて転がるティアールが肩目を苦痛で閉じながらも一方の目で辺りを見渡すと三人の少年が立っていた。

「シュ……シュバイア兄様……」

皇帝ゼノアムと同じ金色の髪と金色の瞳。

第一皇后セルフィーネの子、シュバイアがそこに立っている。

何も言わずに哀れみとも、蔑みとも取れる不快を露にする眼差しをティアールに向けるシュバイア。

ティアールは二歳上のシュバイアが最も苦手だった。

周囲の人間と違いシュバイアは悪口を言ったり、暴力を振るったりはしなかったが、自分を見る時のシュバイアの目が最も苦手だったのだ。

傍に侍る二人の少年はシュバイアの腰巾着で、時期皇帝最有力候補のシュバイアにいつもべったりと付き従っている。

「シュバイア様にぶつかる所だったじゃないか、この呪われた子め！」

腰巾着の一人がティアールの抑えている脇腹をその手ごと蹴り飛ばす。

先刻走った激痛は、蹴られたからだと言う事にその時やっと気付く。踏み付けられ、蹴飛ばされ、シュバイアが鼻を鳴らしてその場を去ろうとするまで、腰巾着の二人はこれでもか、とティアールを痛めつけた。

「シュ、シュバイア様お待ち下さい。」

そう言つて二人がシュバイアを追い掛けて行くのを地面に突っ伏しながら見つめるティアール。

痛みと悔しさで、折角引つ込めた涙が再び涙腺を刺激する。

歯を噛み締めて、それを飲み込み、痛む身体を懸命に動かした。

額を地面に付け、唸る様に悔しさを心の内へ、内へと仕舞い込む。

「逃げるもんか、泣くもんか、負けるもんか。」

「母上がいる、リユナスがいる。」

と何度も何度も冷たいレンガの床へと呟いた。

痛みを癒す呪文の様に。

悔しさを紛らわす合言葉の様に。

そして、強くなる為の魔法を自分に掛ける様に。

それから、迫害され続けたティアールであったが、母とリユナスに支えられ、優しい心と強い心を持ったまま、成長していった。

何度も季節を越え、ティアールは15歳を迎えていた。

その日は母の好物である、リスカパイを買う為にティアールは街へと繰り出していた。

外は綿菓子のような雪が降り、街を白く染めていた。

寒さに肩を竦め、母にもらった上手に編んである青いマフラーを口元まで上げる。

手にはリユナスの編んだ下手くそな手袋。

所々解れているし、貰った時には貶すだけ貶したが、寒さを完全に凌げる様に思い込めて厚手に編まれた手袋は口にする事はないが、大変気に入っている。

「リスカパイを一つ。」

そう言つて、小銭をカウンターのの上に置くと、「いらっしやい」と出て来た店主がティアールの目を見て表情を曇らせる。

蒼い瞳は凶兆の証。

誰が決めたのか、いつ決めたのか知らないが、この大陸ではそれが常識。

慣れているティアールは最早気にも留めない。

高等部に上がつて、さすがに手を出される事はなくなったティアールだったが、今度は誰も近づこうとしなくなった。

話しかけてもこないし、話しかけても反応すらしてくれない人々。まるで、そこに存在しないかのように扱われるが、ティアールにとってはその方が煩わしくない。

こんな風に買い物に出掛けても、時折無視されて目当ての物が買えない時があるのだけは少し困る。

「店主よ、パイを貰えばすぐに去るから。」

そう懇願すると、店主は怪訝な顔をしながらも、ぶっきら棒に小銭を攫い、乱暴に包んだパイをティアールの前に投げる様にして置いた。

「すまない、恩に着る。」

笑顔でそう言つて、パイを大事そうに胸に抱いた。

すれ違ふ街人が悉く、ティアールを汚いものでも避けるかの様に、侮蔑の視線を湛えては後退る。

冷たくなった鼻までマフラーを上げて、急いで人通りの多い道を駆け抜けた。

マフラーの毛糸から微かに香る母の香りを励みにして、街人達の冷たい視線をすり抜ける。

ティアールの家は帝都から外れた所にある。

皇后は王宮の中か、それでなくても帝都の一等地に住まうものだが、呪いの子の母と蔑まれた母は遂には王宮を追い出され、今ではこんな街外れの小さな屋敷に暮らしていた。

勢いよく扉を開けると、リユナスが出迎えに飛び出してきた。

「ティアール様、ああ、こんなに雪に濡れて風邪でも召されては」  
「」

「母上にリスカパイを買いに行つて来たんだよ、リユナスは本当に口煩いな。」

マフラーと手袋をリユナスに押し付けて、頭に乗った雪を払いながら母の部屋へと続く階段を上った。

後ろで何やら、不満気に怒鳴るリユナスの声が聞こえた気がしたが、ティアールは一刻も早く、少しでも温かいパイを母に渡したかった。

「母上、リスカパイを買って来ました！」



「ティアール、そんなに濡れて……。」

「それでは風邪を引きます、さあこちらへ。」

母はティアールを暖炉の前に招き、傍にあつたタオルで優しく頭を包んだ。

「もう子供ではないのですから。」と不満を零すティアールだったが、それを振り払おうとする気配は一切ない。

暖炉の熱気と母の香り。

急激に温まる身体に意識がふわふわとする。

自分を気に掛けてくれて、嬉しくもあつたが、折角買つて来たパイに関心を示してくれない事に悔しくもある、不思議な気分になったけれど、一通り水気を拭き取り、服を着替えさせた母は、買つて来たパイを見て、大袈裟に喜んでくれた。

店主が乱暴に置いた所為や、急いで走つてきた所為で、包みの中で不細工に潰れてしまつているパイに声を上げて喜んでくれる母。

ティアールはそんな母が大好きだった。

少し開いたままの扉の前で入りづらそうにしているリユナスも、そんなティアールと母を見るのが大好きだった。

「リユナス、そんな所にいないで、入つておいでなさい。」

扉の前に立つリユナスに気付いた母が中に招くと、ばつが悪そうにひよっこりと頭を出し、照れくさそうな表情で部屋の中へといそいそと入ってきた。

パイをお腹一杯に食べた三人は暖炉の前で寄り添つて座った。

やがてティアールとリユナスは温かい暖炉の熱と、心地よい母の香りに微睡んでいった。

暖炉の火が落ちている事に気が付き、寒さにぶるつと身体を震わせて、ティアールが起き上がった。

隣には気持ちよさそうに毛布に包まって眠るリユナスがいた。

毛布の大きさから見て、恐らく二人に掛けられていた毛布をリユナスが独り占めしたのだと思われた。

気に入らないティアールはリユナスの鼻に指を突っ込んで、煩わしそうな表情をするリユナスを見て、満足そうに悪戯な笑みを浮かべた。

つまらない事で満足したティアールが当たりを見渡すと、母がいなかった。

「母上？……こんな夜更けにどこに行つたのだ？」

不思議に思つたティアールは部屋を出て、キッチンに向かった。

母は眠れず目覚めてしまった時はホットミルクを作つて飲む事を知つていた。

ティアールも幼い頃、悪夢に目を覚ますとよく作つてもらつた事があり、それを思い出しながら階段を下りていると、懐かしくて笑みが零れた。

案の定、キッチンに人の気配を感じたティアールは驚かしてやろうと、静かにドアノブに手を掛けた。

## 第十五話

こつそりと忍び込んだティアールの瞳に映ったのは、こげ茶色の床に広がる赤。

いつも食事を摂る机は脚が折れ、無残にも上に置いてあった花瓶が床で碎け散っており、中の水が床の赤を薄め、差してあったリコスの黄色い花は、見た事のない紅い花へとその様相を変えていた。

高鳴る鼓動と集束する瞳孔。

横たわる最愛の母の変わり果てた姿に言葉を失い、膝を付く。

まだ生暖かい母から溢れ流れた赤がティアールの服を紅く染めていく。

そして、湧き上がる怨嗟と慟哭の雄叫び。

「あぐう、うごお、うわあああつあ」

言葉に成らない悲鳴に慌てて飛び起きたリユナスが部屋へと駆け寄る。

ティアールと同じように悲鳴を上げ、眼前の光景を自分の気がおかしいのだと言いたげに美しい白銀の髪を振り乱して頭皮を引き千切るかの様に頭を掻き乱す。

「どうして、ティノワール様……」

ティアールが、もう動く事のない母へとにじり寄り、冷たくなった手を己の頬に当てた。

胸元には一文字に切り裂かれた傷。

だくだくと流れる血をせき止める様に手を当てるが、母の命が徐々に手から零れ落ちていく。

炸裂音の様な齒軋りにリユナスは慌ててティアルを見つめる。

深い悲しみの色に染められた蒼い瞳から流れる紅い血の涙。

自分のよく知る優しい皇子はそこにはすでにいなかった。

悲しみと憎しみに顔を歪ませながら、少年は怒りに震える声で囁いた。

「すべてを、壊す。」

「私がこの醜い世界に終わりをくれてやる。」

ティノワールが死んでひっそりと葬儀が行われた。

結局ティアルとリユナスを除いて、誰一人として参列者はいなかった。

屋敷の近くの小高い丘に母の亡骸を埋め、十字を立てる。

悴む手に吐息を吹きかけ、暖を取るとほんのり色づいた赤い指先があの日、母を抱いて赤く染まった血塗られ両手を連想させた。

気を利かせてリユナスがその場を去ってから雪がちらつく丘に腰を降ろして十字を見つめていた。

母が遺したマフラーを鼻の頭まで被り、ゆっくりと息を吸い込むと母の匂いがした。

それは安らぎをくれるいい香りのはずなのに鼻の奥をつんと刺激した。

葬儀から幾日か経った頃、いつもの様にリユナスが食事をティアルに運んだ。

ティアルは母の傍で囁いた言葉を最後に口を開く事も、何かしらの感情を表に出す事もなかった。

食事も摂らず、リユナスに視線を向けることもなく、どことも定まらぬ虚空を見つめているかの様だった。

「ティアル様、あれから幾日もお召し上がりになっていません。」  
「それでは身体を壊してしまいます。」

リユナスは無反応なティアルに溜息が一つついた。

外には雪が降り積もり、嬉しかった思い出も、楽しかったあの日々もすべてを白く覆い隠してしまいそうで、何だか恐ろしかった。

「ここに置いておきます。」

「今日は必ず食べて下さいね。」

ティアルの前に膳を置くと、ティアルが食器を手を取った。  
すっかり細くなり骨ばった腕が、食事を小刻みに震える口に運ぶ。

「……相変わらず、料理が下手だ。」

「だが、礼を言うぞ、リユナス。」

言葉を発したのも、笑顔を見せたのもあれから初めての事だった。  
リユナスは嬉しさのあまりその場に泣き崩れ、自分の膝に掛かる布団の上に俯き、声を上げて泣いた。

ティアルはそんなリユナスを優しく見下ろし、力の入らない腕を懸命に動かして銀髪を指ですかした。

あの夜の囁きをしっかりと聞いたリユナスはティアルが犯人を探し出し、必ず復讐を成し遂げる気だと思っていたが、ティアルは自堕落な日々を送るばかりだった。

陽が高く昇ってから漸く起きては、ごろごろとベッドに寝転び、本を読み漁る毎日。

一日を通して、ベッドを出るのは用を足す時と食事をする時ぐらいであった。

すでにティアールの自室には夥しい数の書籍が散らばり、ベッドまでも侵略し始めている。

「そんなにゴロゴロしてばかりだと、いつしかそのベッドに収まりきらないほどのおデブさんになりますよ?」

「ゴロゴロしているわけではない、勉強に勤しんでいるのではないか。」

確かにティアールが読み漁るのは小難しい勉強の本や、兵法書ばかりで娯楽書を読む事はなかった。

「それより、なんだその召使の様な格好は?」

「私は永久にティアール様のお傍に仕えると決めたのです。」

「その決意の表れと申していただければ」

召使の衣服を纏い、腰に手を当てながら寝転ぶティアールを睨み付けるリユナスに「そうか。」と小さく答え、顔を逸らす様に素っ気無く寝返りを打った。

雪が溶け、春が来てもティアールはそのままの様子で日々を過ごした。

そして雨が降り続き、じめじめとした日が続くある日の事だった。街に買い物に出かけていたリユナスは騒然となる広場に気付き、何事かとその雑踏へと身を投じた。

「号外だ!」

「また連続殺人鬼、死の探求者<sup>デス・リバー</sup>が現れた！」

「今度の犠牲者は、バルキルト伯爵一家の六名だ！」

リユナスは、ばら撒かれる号外チラシを手に取った。

そこには死の探求者と呼ばれる殺人鬼がこれまで58人も人間を殺したと書かれていた。

一番最近はず、伯爵のバルキルト卿一家、4人が殺され、その殺害方法には一切の情けもなく、女子供も皆殺しだったと言う。

バルキルト卿と言えば、かなりの権力者で護衛の兵も相当数いたはずなのに、護衛達は犯人が侵入した気配すら感じなかったらしい。

家に帰ったリユナスは、死の探求者の事を世間話をするように何気なくティアールに報告した。

それを聞いた途端、ティアールの顔からここ最近の穏やかな表情は消え去り、それと入れ替わりに残虐な笑みが浮かんだ。

リユナスの背筋が悪寒に逆立つほど、残虐な笑みが。

「いい気味ではないか、こいつも私や母を率先して虐げた者だ！」

「見てみれば、被害者はすべて貴族や皇族どもではないか、これほど愉快な事はない！」

苦しそうに腹を抱え、ベッドに転げながら大笑いする。

そんなティアールが恐ろしくて、リユナスは声も掛けられず、その場に立ち尽くした。

しばし笑い転げていたティアールがピタリとその動きと笑いを止めた。

そしてゆっくりとリユナスを見るティアールの瞳を見て、さらに背筋が凍りついた。

深海に感情を沈めたかのような蒼い残忍な瞳。

そんな悲しみを湛え、怒りを湛え、喜びを湛えたような複雑な冷笑。

「ティアル様……？」

「まさか。」

ハツとした様にリユナスは口に手を当てて、距離を取った。  
その顔は蒼白で、呼吸が乱れている。

「どうした？ 何を怖がっている？ リユナス。」

「私はこの世界を終わらせる、そう言ったではないか？」

「目撃者を出さない様に事を成すのは大変だったよ。」

「腐るほどの兵法書や学術書を読み漁り、街の地図や地下道のすべてを把握した……。」

「大変だったよ……、だがしかし愉快だ。」

ティアルがベッドを立つと、乗っていた書籍がバサバサと床に落ちた。

今まで信じていたものがすべてが崩れていくかのように、積み重ねた書籍の牢獄はバサバサと崩れていく。

崩れ落ち、床に広がる書籍を踏み躪りながらリユナスへと近づく。  
目の前に立ったティアルは壁に背を付き、震えるリユナスの白銀の髪をその手に掬った。

「当然の報いだ。」

「リユナスもそう思うだろ？ この号外を見て、ざまあみろと思ったのではないか？」

確かに心のどこかでリユナスは思った。

けれど、それはティアルのそれとは大きく異なった。

「ティアル様、でも彼らがティノワール様を殺したわけでは」



「あいつ等が殺した！」

震えながらに紡がれた言葉は痛烈な怒声に掻き消される。

浮かべていた冷笑は消え去り、殺意に満ちた憎悪の片鱗がその片翼を除かせる。

「実際に手を下した奴も必ず見つけ出して殺すが、それ以外のすべてを私が赦す事はない。」

「私達を虐げた民衆も、蔑んだ貴族も、捨てた皇族も、すべての生ある者の存在を私は赦さない。」

「だがリユナス、お前は違う。」

「お前だけは……」

咄嗟にリユナスはティアールを突き飛ばした。  
あまりの憎しみと悲しみに曝され、胸が驚掴みされる様な恐怖と哀れみ。

「ティノワール様は、そんな事を望んでは」

再びリユナスの言葉を遮るのは怒声ではなく、甲高い慟哭の叫び。  
突然、狂った様に喚き散らすティアールに呆気にとられて膝が大きく揺れる。

叫びが止まった後に湧き出てきたのは侮蔑の嘲笑。

「そうか、リユナス。」

「お前もなのか……。」

顔を覆い隠すように被せられた右手から除く眼光は、明らかに敵意を含んだものだった。

次の瞬間、ティールはその身を翻し、自室の窓を突き破って外へと飛び出した。

辛うじて言葉に成るか成らないかの、制止するリユナスの叫びは激しい雨音に掻き消されていった。

割れた窓硝子に混じり、落ちていたのは捨て置かれた厚手の手袋だった。

力任せに引き千切ろうとしたのか、その手袋は無残にも伸び、元々解れの酷かった毛糸はさらに解れてしまっていた。

リユナスは懸命にティールを追った。

帝都へと続く泥濘ぬかるんだ道に脚を取られ、その身を泥に塗れながら。

帝都の広場を見て、リユナスは愕然とした。

いつもは賑やかで笑い声の絶えないその場所が、今は見る影もなく絶望と怨嗟の渦と化していた。

ティールが剣を振り回し、手当たり次第に街人を斬り捨てる。

涙を流しながら人を殺め、笑い声を上げる。

血の雨が降り注ぐとはまさにその光景の事であった。

豪雨が降り続く帝都の広場の石床に血の川が流れている。

飛び散る鮮血は、街を徐々に悲劇の色へと染め上げる。

血の中に遊ぶ悪鬼の様な主の姿は、リユナスの知るどの姿ともかけ離れている。

やがて大勢の衛兵に囲まれ、その身を押さえ込まれ、血溜りへと突っ伏す。

取り押さえられて尚、喚き散らし、呪いの言葉を吐き続けるティールの姿は、まさに死の探求者と呼ぶに相応しかった。

すべての死を願い、そして自分の死すらも願っているような。

悲しくも哀れな死の探求者



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2495y/>

---

脆弱の王

2011年11月26日16時54分発行